



第16図 吉岡昭作成の「岩ヶ平遺跡地図」(昭和17年)【吉岡1944】※一部文字追加改変

いる〔森岡編2004〕。後期には高地性集落として阪神間ではじめて調査された会下山遺跡や城山遺跡があり〔村川・石野1964、村川・石野・森岡1985、村川・森岡1976〕、会下山遺跡では遺構が保存され県史跡公園として整備・活用されている〔芦屋市1971〕。なお、旧石器から弥生時代にかけての遺跡の古記録として、吉岡昭が戦前に残した分布メモ地図は貴重な資料として伝わっている(第16図)〔吉岡1944、村川・森岡1976〕。

古墳時代では、前期段階から翠ヶ丘台地上にいくつかの有力古墳が築造される。前期(4世紀)に築造された古墳としては、現在「阿保親王墓」として宮内庁書陵部に管理されている阿保親王塚古墳があり、中期には5世紀後半段階の金津山古墳、5世紀後半~6世紀初頭の打出小槌古墳が造営される。後期に入ると、芦屋川右岸に立地し、渡来系氏族との関係が注目される城山・三条古墳群や、後述する八十塚古墳群など、横穴式石室を基本とする規模の大きい群集墳が次々と築造される〔森岡・古川編1979a・b、関西大学考古学研究室編2002〕。第17図はその南半部付近一帯の分布図として示す。

奈良時代には、市街地北西部の現西山町付近に芦屋庵寺が創建される。特徴的な遺物には7世紀末までの年代



第17図 市街地北東部の遺跡分布図（1/6,000）

を示す法隆寺系や7世紀後半の高句麗系の瓦、焼成前に「寺」とスタンプされた鉄鉢形の須恵器がまとまって出土している〔芦屋市教育委員会 2001a〕。寺域の中核はわかつてはきたものの、伽藍配置を確定する材料はまだ断片的であって、将来に期するところが大きい。

中世になると、本市域の平野部や低丘陵が生産域として定着するようで、各所で水田遺構を確認することができる〔森岡・竹村編 1999、竹村編 2002、竹村編 2004、森岡・坂田 2004、森岡・坂田 2005a・2005b〕。特記すべきことは、南北朝期の内乱に伴い、足利尊氏勢と楠木正成の軍が陸・海交通の要衝で戦った「打出浜の合戦」と、室町時代後期に摂津の有力な国侍の一人、瓦林正頼が鷹尾山山頂に築いた山城をめぐる攻防である。

近世に入ると、元和3年（1617）に尼崎藩主戸田氏鉄の統治下に入り、元和6年（1620）から寛永6年（1629）には後述する徳川大坂城再築に伴う採石活動が広範な地域で行われた（V章(5節)に詳述）。寛永12年（1635）、青山幸成が当地に移封され、以後青山氏が4代76年間にわたって尼崎藩主となった。岩ヶ平・朝日ヶ丘などの段丘

斜面への新田展開も該期にはほぼ完成したと言える。次いで、正徳元年（1711）、松平氏が統治をひき継いで7代180年間を経て明治維新を迎えた。

幕府領（芦屋・打出）と尼崎藩領（三条・津知）とに二分されて近代を迎えた本市域の四か村は、慶応4年〔明治元年〕（1868）、前者が兵庫鎮台（改称して兵庫裁判所）の管下に入り、のちに兵庫県（一次）に属した。後者は明治2年（1869）の版籍奉還により尼崎版県となり、同4年の廢藩置県の廻行で尼崎県の管下に属した。同年11月、尼崎県は兵庫県（二次）に編入され、ここに四か村が初めて同一行政管下におかれることとなった。現在の芦屋市の原形と住民の結束ができ上がる歴史的契機をなしたといえる。〔武藤編1971、芦屋市1971〕

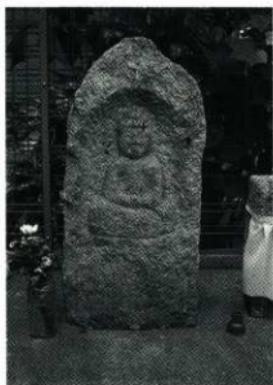
明治4年（1871）、区政が新設され、兵庫県（一次）において芦屋・打出二か村は第17区に属し、兵庫県（二次）再編後は四か村が第16区（のち第6区）に所属する経過をたどった。

明治11年、区政は廃され、菟原郡役所の管内となり、同13年7月から実施された連合町村戸長制によって、芦屋・三条・津知の三か村は深江村に戸長役場をおき、打出村は単独で戸長を配した。

明治22年（1889）4月、町村制施行に伴い、從前の四か村は合併、学校名をとつて精道村が発足し、村役場が精道小学校内に設けられた。同27年、兵庫県では郡制施行により兵庫・菟原・八部三郡を合し、新たに武庫郡としたが、大正12年には機能的に消滅するに至っている〔田辺・森岡ほか1979〕。

近代交通に関しては、明治7年（1874）、大阪-神戸間の官設鉄道が開通し、大正2年（1913）には芦屋駅が新設された。また、明治38年（1905）の阪神電鉄敷設に伴い、打出・芦屋駅が、大正9年（1920）の阪急電鉄神戸線の開通により芦屋川の停留所がそれぞれ開設。さらに大正3年（1914）には、村内里道の改善整備がなされて、昭和2年（1927）に阪神国道（現国道2号線）が開通した。南北僅か2km程度の扇状地形を中心とする沖積地に東西交通はすこぶる密度を増した〔森岡・島田1988〕。

こうした交通事情の急速な発達を背景に、明治から大正にかけて山手の丘陵地帯を中心に邸宅建設が広がり、昭和初年には宏壮な住宅街が形成され、農地から宅地へと地目が著しく変貌した。また、生活環境改善事業の一環として、二度にわたって芦屋川の大改修が行われたが、昭和9年（1934）と同13年（1938）の



第18図 北向地蔵尊（弓木町）



第19図 天上川八幡神社（参道沿い）



第20図 八幡神社内（神戸市灘区八幡町）



第21図 弓弦羽神社踏石（御影町郡家）

風水害により空前の被害が生じた。芦屋川による被害は、昭和42年(1967)の長雨によっても生じている。村勢の発展を戸口の増加によって概観すると、精道村誕生当時の明治22年(1889)には597戸、3,028人であったが、昭和2年(1927)には4,305戸、20,779人と急激に上昇している〔武藤福1971、芦屋市1971〕。

大正時代以前の主要産業はやはり農業であったが、明治時代中期には芦屋川の余水を利用した水車による粉挽業がみられ、素麺製造などが家内工業的に営まれた。本村の乏しい産業の中で特筆すべきは牧畜乳業であり、他に酒造業・水産業も僅かながらみられた。かつて川西町にあった東洋牧場を知る人は今はきわめて少ない〔芦屋市1971〕。

冒頭でも述べたが、昭和15年(1940)11月10日、市制施行、全国で第173番目の市となった。村から市へ町を飛び越えて一躍移行したことは注目すべきことであり、全国では僅か宇部・岡谷二市の前例をみるにすぎない。当時の人口は41,925人、戸数8,147戸であった。また、同19年には旧村時代の四大字と200余の小字名が町名に変更され、新たに43町が成立、新番地は各町ごとに東北隅を1番とし、順次西南隅を終番とする形で付された。

第二次世界大戦の空襲によって本市も四回被災し、総戸数の4割の家屋が焼失した。戦後はその再建復興に全力を傾注し、駐留軍の家屋接收、旧制度の改廃の下、戦災指定都市による復興地区画整理事業を推進、隣接諸地域との合併構想を基礎に、昭和26年(1951)2月には「芦屋国際文化住宅都市建設法」が公布され、独自の都市づくりを目指して邁進するに至った。昭和35年(1960)には芦屋川畔に新市庁舎が竣工。同37年(1962)5月施行の「住居表示に関する法律」に基づいて、本市も街区符号と住居番号によって表示する方法を採用、43年(1968)5月より順次実施されている。土地区画整理事業は、30年代後半に北部で、40年代後半には中部で着手され、その後、南の春日地区が進められ、西国街道も大半が消滅した。〔田辺・森岡ほか1979〕。また、昭和42年(1967)以来、芦屋背山グリーンベルトの計画も進んでおり、平成13年8月以降は六甲グリーンベルト整備事業が具体化しつつある。

戦後は文教政策に力が注がれ、学校建設の進展により、県立高校1校を筆頭に市立の小学校6、中学校2、高等学校1校が整えられ、私立学校も数多く設立をみ、また病院・公園・奥山貯水池なども完成した。また、国際交流の一環として、昭和36年(1961)にはアメ



第22図 岡川遺跡1号石材（小浜藩京極家）



第23図 岡川遺跡2号石材（赤穂藩池田家）



第24図 岡川遺跡6号石材（松江藩堀尾家）



第25図 岡川遺跡3号石材
(松江藩堀尾家・長州藩毛利家)

リカ合衆国のモンテベロ市と姉妹都市提携を締結した〔芦屋市 1971〕。

以後、「芦屋市民憲章」の制定や、「縁ゆたかなまちづくり条例」の制定、高度地区指定などは、本市の性格を特色づけるものといえよう。昭和 45 年（1970）には「芦屋市同和対策審議会答申」があり、教育行政を通じてその推進をはかるとともに、具体的な同和対策事業への取り組みも行われた。また、市民生活の向上をめざした福祉事業への努力が今日も続けられている。

流入による人口も激増し、昭和 28 年（1953）には 5 万人を超える、昭和 45 年（1970）段階には約 7 万人に達して、県下第 9 位を占めている。さらに、昭和 57 年（1982）には、芦屋シーサイドタウンと称する人口約 2 万人の新しい海浜街が完成した。また、海岸部を中心に文化施設ゾーンの整備もなされていった。

しかし、海浜埋立事業・交通公害・自然破壊など、本市は市民の生活環境を守るために、解決されねばならぬ問題も数多く抱えており、平成 7 年（1995）に発生した阪神・淡路大震災を受けての復興計画の推進も市財政の急落とともに大きな課題として残っている。以上が本市の歩んだ歴史のあらましである〔森岡・島田 1988〕。

本節の最後に、調査地周辺の遺跡環境をミクロな眼でたどってみたい（第 17 図）。

当調査地の所在する岩園町周辺には、岩園天神社西遺跡、岩園天神社東遺跡、八十塚古墳群岩ヶ平支群、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群などの埋蔵文化財包蔵地が存在し、縄文時代から近世にわたる複合遺跡群を形成している。芦屋市遺跡分布地図（第 17 図）〔竹村・森岡編 2001、一部抜粋・改変〕に基づくものであり、表採資料も多く、個々の古墳についてはいくつかの調査が実施されているが、各期を通じた遺跡群全体の遺構分布・密度・実態は不明瞭なエリアが今なお多く残っている。

岩園天神社西遺跡、岩園天神社東遺跡は、今回の調査地 B・C 地区に西接する岩園天神社周辺に位置する。神社境内にも横穴式石室が 2 基現存しており（岩ヶ平支群 C 小支群の 13・14 号墳）、六麓荘・岩ヶ平台地上で現在確認されている最も南端に位置する古墳といえる。当遺跡は岩ヶ平遺跡とも称され、市井の考古学者 吉岡 昭作成の『岩ヶ平遺跡地図』（昭和 17 年）に見ることができる（第 16 図）。その中で、岩園天神社やその西方において打製石鎧をはじめとする石器や、土器片などの採集品が記録されている。石器は、石包丁・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・磨製石剣などがあり、サヌカイトやチャートの他に黒曜石製のものも含まれていたと記されている〔村川・森岡 1976〕。土器は、縄文土器・弥生土器が出土しており、縄文時代から弥生時代の包含層が遺存していることを暗示する。

八十塚古墳群は、岩園町・朝日ヶ丘町・六麓荘町・鷺谷および西宮市苦楽園四番町・同五番町・同六番町・老松町一帯に広がり、阪神間の市街地にあってはもっとも大規模な群集墳である。現在 62 基の古墳が確認されており、うち約 40 基の発掘調査や確認調査が実施されている〔村川 1966a・1966b・1971、勇・藤岡 1976、勇・藤岡・前田・古川 1978、森岡 1984・1988a、森岡・古川編 1979a・1979b、森岡編 1983、森岡・和田・古川ほか 1990、関西大学考古学研究室編 2002〕。東西約 700 m、南北約 900 m の範囲に 5 支群から成る市内最大の群集墳であり、往時は 100 基を越える数の横穴式石室があったと推測される。

徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群は、元和 6 年（1620）から寛永 6 年（1629）の 10 年間に行われた徳川幕府による大坂城再築事業にかかる石切丁場の遺構である。東六甲採石場は、前節や「Ⅲ-①」で詳しく触れているため重複をさけるが、ここでは岩ヶ平刻印群の概略を記しておきたい。岩ヶ平刻印群は、市街地北東部に位置し、東方の西宮市と境を接する（実際は市境を越えて、西宮市域に連続する）。当刻印群の分布範囲は、長背尾根を奥山刻印群との境として北西から南東に派生する尾根と谷（ユルキ谷、ツルベ谷）を取りこむ範囲であり、今後拡幅していく可能性は十分に考えられる。市文化財行政史のなかでも、もっとも調査件数が多い刻印群であり、得られた成果は普請大名の丁場割りをはじめ〔藤川 1979、森岡 2005a・2005b・2005c、森岡・古川 1992、古川 2003・2004〕、当刻印群で確認された刻印と大坂城の石垣刻印との照合〔藤井 1982a、森岡・坂田 2005b〕など、多種多様な検討角度とテーマでもって、一歩進んだ興味深い知見が得られている。

（森岡・坂田）

III 德川大坂城の石垣と石切技術

(1) 德川大坂城とその探石場

① 大坂城再築に至るいきさつ

慶長20年（1615）の大坂夏の陣により、豊臣秀吉の築城した豊臣大坂城は落城し、その後、徳川幕府による大坂城再築事業が計画された。この再築された新生大坂城を慣用にしたがい「徳川大坂城」と呼び、豊臣期の初期の大坂城とは区別して呼称する。また、大阪・大阪の文字の使用についても使い分けるものとする。

徳川家康は元和元年（1615）、先ず外孫に当たる松平忠明に大坂10万石の所領を与え、大坂城を包囲する摂津・河内及び城下の押さえとした（『駿府記』『駿家編年録』など）。忠明大坂拝領については城代・城主両説がみられ、すぐに大和郡山に転封となつたため、明らかな城代としては内藤信正が入っている。幕藩体制下、大坂は西国支配の拠点であり、政治・経済の中心として機能する番城の役割を十分担うことのできる場であった。具体的には南方和歌山の徳川氏、岸和田の松平氏、西方尼崎の戸田氏、北東高槻の松平氏による親藩・譜代一門による軍事性実る大名配備が行われた。そして元和5年（1619）における大坂直轄地化の実現は、その後の作事や普請を本格化させたのである。

徳川幕府による再築は、家康の死後、二代将軍秀忠の命によって開始され、三代将軍家光の時代に完成了。工期は元和6年（1620）から寛永6年（1629）の10年3工期にわたるものであり、元和6年から第1期工事が始まり、寛永元年（1624）の第2期工事、寛永5年（1628）の第3期工事とほぼ継続的に進められた（第1表、森岡編 1998）。いわゆる「天下普請」で行われた再築事業は、西国64家の大名を投入し、豊臣親縁大名の経済的負担を強いることや徳川幕府の権勢誇示を企図していたと考えられる。再築に当たっては、設計図とも言うべき新規の繩張りを藤堂高虎が担当し（第3期目は尼崎藩主 戸田氏鉄）、土台となる石垣再築に際して、豊臣大坂城の本丸・二の丸を凌駕し完全に覆い隠すほどの巨大性・高層性が志向された（第26・27図）[岡本 1983]。まさにこの大事業は、豊臣期大坂城の修復程度のものではなく、石垣の高さや幅・深さなど一新した内容を備え、徳川幕府による天下統一の物的証しであり、豊臣恩顧の西国大名の完全掌握を目論んだものとも言えよう。

何故なら、かのような城普請は大坂城が最初ではなく、徳川家が実権を握った直後から計画されていたことであ



第26図 現在の大坂城の天守閣と石垣・外濠 備観（岡本編 1983 より転載）

大坂城修築工役	工 期	着手場所	普請總指団役	普請奉行	参加大名
第1回工役	元和 6 年(1620) 1月～	二の丸西・北・東 三の丸 北の外曲輪	藤 堂 高 虎	戸 田 氏 鉄 村 田 権 右 衛 門 日 下 部 宗 好 波 迅 勝 花 房 正 成 長 谷 川 守 知	31か国 48家
	元和 8 年(1622) 6月～	本丸天守台			
第2回工役	寛永元年(1624) 1月 寛永 2 年(1625) 2月	本丸 山里丸 本丸石垣の修築 完了	藤 堂 高 虎 (計画) 戸 田 氏 鉄 (総奉行) 安 藤 重 長 青 山 幸 成 (検分)	加々爪 忠 澄 日 下 部 宗 好 堀 直 之	32か国 57家
第3回工役	寛永 5 年(1628)	二の丸南 外濠	戸 田 氏 鉄	加々爪 忠 澄 堀 直 之	32か国 54家

第1表 徳川幕府による大坂城の修築事業とその工程〔森岡編 1998〕

り、むしろ徳川大坂城は天下普請で行われた城普請の到達点として見ることができるからである。民衆のみならず旧豊臣家臣に根強く残る「太閤秀吉」の威光を払拭するため最初の手立てとして行われた仏像・寺社の修復や、城普請は大義名分を兼ね備えた絶好の大事業であった。特に、命ぜられた諸藩大名の負担で行われた城普請の二、三の例を挙げると、慶長 5 年(1600) 関ヶ原合戦の 4 年後には始まっている。慶長 9 年(1604)、家康の命により江戸城の修築を、同年彦根城についても行い、さらに同じ年、西国諸大名に課して伏見城を修築させた。ついで慶長 12 年(1607) に駿府城とともに再び江戸城の修築を、翌 13 年には前年に焼失した駿府城の再築を、慶長 14 年には丹波篠山城を、同 15 年には尾張名古屋城を築かせたのである。このように、20 数年にわたった徳川家主導による城普請は、徹底的なまでの大名工役を強いており、慶長 12 年の駿府城築城に当たっては豊臣家そのものへも工役を課している〔岡本 1964 など〕。政治的な面で強く進められた天下普請ではあるが、その一方で長期にわたる協業に基づく、工役から築城・石垣構築など技術面においても各段の進歩と普及を促したと言えよう。

以上、経過をかい込んでみたように、豊臣家、徳川家の激動の政権交代の狭間で、大坂城そのものはまるで衣を着替えるかのごとく歴史的変遷を経たのである(第1表、第27図)。

② 徳川大坂城にかかる採石場

徳川大坂城の石垣には、大量の花崗岩の巨石が用いられている。使われた石材総数は、一説に 200 万とも 400 万とも言われ、西国各地の主要採石場から切り出されている。それらを具体的に示すと、幕府領小豆島(現、香川県)をはじめ、その西方に位置する壇龜諸島(備讃瀬戸に点在する 28 から成る島の総称)・牛窓町前島などの瀬戸内海域の島嶼部・四国讃岐庵治・周防大津島などから運ばれ、また、近畿内陸部では廃城となった伏見城の石垣を解体し転用したものや、加茂、笠置、生駒西麓から広く供給されている。本書で報告する六甲山地の採石場は、花崗岩の巨石が豊富な上、大坂城の近傍で海路を利用できる点で特筆すべき立地条件を示している。

採石場(石切丁場)の適合条件については、①需要に見合う法量の石材の調達が可能、②数量の確保、③材質の良さ、④運搬の至便さの 4 条件が要となる。そのうち①～③は、「II 遺跡をとりまく環境」で既に述べた花崗岩の性質の違いが深く関係し、いわゆる花崗岩体の節理間隔(第13図)によって、採石場・石切丁場ごとに要求される石垣用材の種類(基本的には大きさと数量)がおのずと規定されたようである(第28図)。

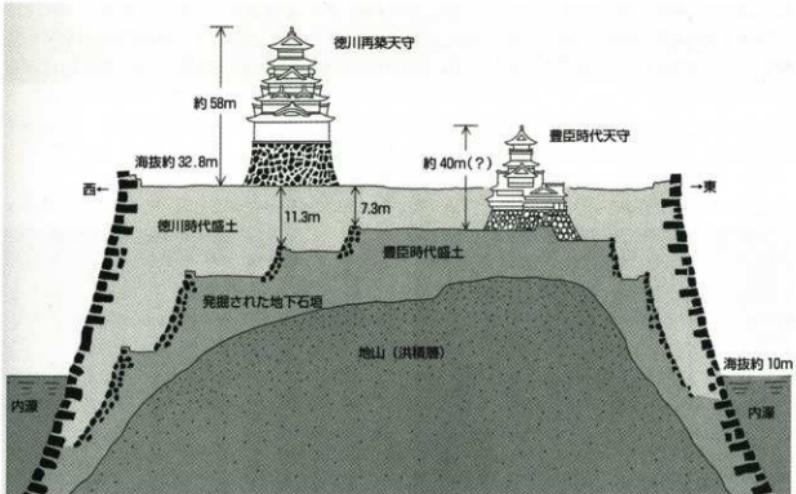
以下、大坂城に関わる主だった石切丁場をあげ、若干の説明を加える。なお、豊臣大坂城の石材調達場と重複する丁場の存在は十分予測されるところであるが、該期の石垣構築手法が自然石を利用した野面積み(乱積み)

を基本としているため、矢穴痕や刻印などの人為的痕跡が乏しく、同じ土俵では証拠不十分で議論できない。

東六甲 現在築かれている徳川大坂城の石垣の半数以上の石材が当地域の採石場から運び出されたと言われております。その供給量は膨大である。本遺跡の属する岩ヶ平刻印群も東六甲採石場の一角を占めている。大坂城からみて至近距離に位置し、最大の規模を誇っている。昭和43年(1968)、芦の芽グループ会員小倉幸一氏(県立芦屋高校)がその発見の端緒をつくった(村川1970、藤川1972・1980b、森岡2003)。石切場は現在のところ7群に分けられ、その範囲は、神戸市東灘区付近から芦屋市域を経て西宮市西部に至る東西6.5km、南北1.5kmにわたって広がる。前章で記述したため重複を避けるが、若干補足すると、瀬戸内海域の島嶼部の採石場・丁場と比較して、供給していた石材の法量に違いが見られる。具体的には、瀬戸内海島嶼部が隅角部の角石・角礫石など大型の石材をも切り出していたのに対して、当採石場では一部の例外を除くと、そのほとんどが築石程度の石材を切り出していたと考えられる。そして、石垣を構成する石材の中でもっとも数多く必要なものが築石であり、逆に言えば、築石クラスの調整石であれば東六甲から無数に供給することが可能であったからこそ、対象数量・在蓄丁場数において最大級の採石場となつたのであろう。

小豆島 瀬戸内海に浮かぶ淡路島に次いで大きい島である。行政区画では香川県小豆郡であり、備讃瀬戸と播磨瀬戸の間に位置する。東西20km、南北16kmの規模の島で、面積は153.20km²(豊島など属島を含めると約169km²)を測り、温暖少雨の気候が特徴の一つである。地質環境は、良質の花崗岩と称される領家花崗岩類を基盤岩にもち、その上に火山活動で生じた溶岩流と火碎流が覆っている。斜面には花崗岩の転石や露頭が確認でき、地質環境においても石切丁場の条件を兼ね備えている(徳島文理大学1998、古田2005)。

島内の歴史は豊かであり、旧石器時代後期(土庄町戸形遺跡)に始まり、弥生時代の長浜貝塚、古墳時代では神獣鏡を保有していた亀尾山古墳ほか、妙見山古墳・富丘古墳群・弁天島古墳群などが知られている(石野ほか1999)。中世に入ると、最も高い山である船越山(星ヶ城山、816m)の頂に、山城として星ヶ城跡が築かれる。そして近世の石切丁場が展開する。本島の石切丁場は、海岸線に沿って数多く確認されており、史跡・天然記念物に指定された内海町岩谷丁場(八人岩・南谷・天狗岩・天狗岩磯豆腐石・亀崎)や福田丁場、土庄町小部片桐ろくろ丁場・小海丁場、土庄町西海岸の小瀬・千軒丁場などが存在する。上記した大半の石切丁場が「海岸丁場」と呼ばれるほど波打ち際に近く、割り取りから船出し波止場までの石曳き距離が短いことが特徴である。これら



第27図 豊臣期と徳川期の大坂城立面観比較(岡本1983から転載、一部改変)

徳川時代本丸東西幅=約220m、豊臣時代本丸東西幅=約200m(?)、現天守閣の高さ=54.8m。



第28図 石のふるさと [岡本 1983 を一部改変]

の立地環境も手伝って三間角（石）規模の石垣用材が得られたものと思われる。〔北垣 2005c〕の表1～4の引用史料の細川家・永青文庫「元和七年塙鮑・小豆鷦御仕置石数之覚」、「小豆鷦・塙鮑両所之御石目録」、「塙鮑久

大阪へ積上セ申御石数之覚」、「塩飽御丁場ニ而御役人御着到前指引目録之事」には、二面角・三面角の荷出し個数が挙げられており、両者合せて十数個に達する時もあったことが記されている。なお、小豆郡内海町の石切丁場跡は、昭和 47 年（1972）に国指定史跡「大阪城石垣石切丁場跡」として告示されている（第 31 ~ 35 図）。前島 畠山県の南東端、本州に接近して位置する瀬戸内海の小島である。同県邑久郡牛窓町に所在し、面積は 2.426 ha を測る。前記した小豆島は、南南東約 10 km の指呼の間に位置する。小字名に「岩くだし」や「丁場」が確認できるが、大阪城関連丁場と認識されたのは、地元住民の連絡を受け、昭和 52 年（1977）に大阪城天守閣によって行われた現地踏査が最初となろう〔中村 1979〕。昭和 52 年の調査では、東山の A ~ D の地区が対象となり、矢穴をもつ母岩をはじめ矢穴痕を持つ大小の割石、石曳き道の痕跡、刻印石などが確認された。確認された刻印石は「分銅」と「輪違い」で、これらは現大阪城の石垣からも多数検出されており、出雲松江藩堀尾家の丁場であることが判っている。この時の調査では、刻印の法量に関する地区ごとの集中度が抽出されており、大阪城石垣との比較から、採石地と消費地での違いなどが興味深く検討されている。

なお、翌53年の築城史研究会による調査では、鳥取藩池田家の刻印が確認されている。

大阪と奈良を分かつ南北に長い山脈は、標高 643.3 m の生駒山を主峰とする。北は大阪府四条畷市から



第29図 矢穴のみられる「残念石」
(東大阪市善根寺町)



第30図 花園中央公園にある刻印石（東大阪市）
（略越奈自街道ぬかた橋付近より移設）

ら南は柏原市に至る地域である。生駒山は生駒断層（逆断層）が繰り返し活動し、隆起した山脈で、かつ、山地形成過程で生じた複雑な急斜面を呈する。また、西に向かって流下する幾筋もの谷川によって形成された複合扇状地は、宅地開発の進んだ現在でもその形状を確認することができる。狭義の「河内」の名称もこれら生駒山地から派生する谷川と北西に向かって流下していた旧大和川に画された狭い範囲を指して呼称されたと言われている。歴史的環境をみると、扇状地から平地部の傾斜地変換点レベルで、縄文時代の遺跡が確認されている。古墳時代に入ると心音寺山古墳など西麓裾部付近に有力な前方後円墳が築かれ、後期には群集墳が南北方向に高密度を成して複合扇状地上部付近に造営される。古代には山岳寺院の造営をはじめ、難波宮と奈良を結ぶ暗峰越奈良街道や、東高野街道が整備される。大坂城の石垣用材は点的に確認されており、「大坂城残石」「大坂城残念石」として遺存していて（第29・30図）、大坂城から最も近い採石場である。しかし、その生駒山地の岩質は大きくみて2種類に大別できる。一つは、いわゆる「生駒石」と呼称される遼い岩の類で、角閃石・輝石・かんらん石を含み、一見ごま塩をふりかけた様に見えるのが特徴である。もう一つが花崗岩であり、瀬戸内海島嶼部と同様の領家帶花崗岩に属し、表六甲のそれとは異なる〔地学団体研究会大阪支部 1994〕。

(森岡・坂田)

〔小豆島東海岸の石切丁場跡〕



第31図 天狗岩丁場から城ヶ島を望む

写真に写る地域は、「岩谷」の小字名を持ち、鐵丁場が点在する。浜出し・船積み・海出しがまさに直結する石切丁場だ。



第32図 天狗岩丁場(1)

幅5mを越える巨石に穿たれる矢穴列。矢穴列は直線化した精緻なもので、個々の矢穴も大きい。V章で後論する「羊羹削」技法の典型である。



第33図 天狗岩丁場(2)

この丁場には、600個を超える矢穴痕を持つ割石が残っている。

第34図 豆腐石丁場
黒田家の満巻刻印が彫られている。白眉の角取石である。

第35図 八人石丁場

伝承によれば、切り出しの際、8人の石工が下敷きになって圧死したとされ、供養塔（写真左下）が残っている。高さ4m前後。巨石が浅いヤバトリや矢穴列、ノミ跡などを生々しく残している。

(2) 石切技術をめぐる用語について

本書では、各所で石切技術に関する専門用語を多用している。本節ではそれら用語にあらかじめ説明や定義を加え、読者の便に供したい。他地域の採石場ないし丁場の報告で使用をみる術語との十分な調整や議論を経る必要があることは言うまでもないが、本節では、あくまでも共通認識を図る第一歩としての試みとしてご理解願いたい。なお、このような配慮は既刊の報告書のいくつかにおいても断片的ながら既に始められており〔藤川 1979・1980a、藤川・重川・望月 1992、森岡 1994c・1998、古川 2003など〕、ここでは、用語の概念を規定する際のアウトラインを明確にすることを目的とする。

① 母岩(母材)と調整石・準調整石・調整石目的材

東六甲採石場では、岩盤である花崗岩体の露頭を直接割り取る作業は行われていない。段丘隕層に含まれる径2~4m大的自然石(第13・14図)を割り取って、規格に基づいた石垣用石材を獲得していた。つまり、矢穴によって加工され石垣に利用可能な目的的石材を「調整石」と呼び、調整石を得ることが可能な体積を持っている切断前の自然石や、石切丁場に遺存する矢穴痕を持つ石材のうち、調整石を獲得し得た後の比較的大きな石材を「母岩(母材)」と呼称する。母岩と調整石は本来中間工程にみられる加工諸段階の対極に位置している。なお、母岩を「種石」と呼ぶこともある。

しかし、「調整石」の呼称に関しては曖昧な部分が多く、一体どの段階でその範疇に達しているかが問題となる。大坂城に搬入後、最終加工が行われるとした場合、採石丁場では石材選択から船出し直前までの加工になり、山出しからの第一次加工、第二次加工…と各段階が存在する。したがって、こうした加工段階との対応を考慮した用語の使用が不可欠となる。過去、矢穴列によって削られた石材の総称として「矢穴痕を持つ割石」、その中で石垣用材として表面加工(ノミ・ハツリ調整)のみを残した規格品に仕上がっているものを「調整石」、調整石に近い段階ものを「準調整石」、あと数段階の加工を要するものの調整石を獲得し得る大きさを保持しているものを〔森岡 1994c〕での用法を踏襲して「調整石目的材」と呼称されている〔古川 2003〕。

今回の調査地では、狭義の意味での調整石は1石も無く、略直方体の92号石材(第73図)が準調整石に該当するが、本報告では準調整石をも含めて広義に「調整石」と記述しておきたい。

なお、狭義の築石目的の調整石と言えども、小面の一辺が50~90cmの範囲で複数の規格が存在し、かつ、角石・角脇石など築かれる箇所によって必要とされる石材の法量と精巧度が変わることを考慮すると、今後、調整石の中でも縦・横・全長の法量による細分が必要になってくることが予測される。前節で述べたように、瀬戸内海に散在する小豆島をはじめ、壇場諸島では、丁場環境の違いによって需要石材に違いが見られる(第36図)。

② 矢穴と矢穴列・矢穴痕・矢穴列痕

矢穴は、石材を割るために各種ノミ(後述)で穿たれた矢(クサビ)を差し込む穴で、これまでにその形態・法量によってA



第36図 城の石垣と各種用材
a.控え(奥行) b.小面

～Dの4タイプが型式設定されている〔藤川1972、藤川1979、森岡編1998など〕。以下に、模式図によりながら分類の要点を述べる(第37・38図)。ただし、模式図で一律に処理するには難しい側面がある。矢穴の法量は通常、矢に規制され、横方向にせり開く力が偏ければ目的を達するため、ミリ単位の厳密な数値まで一致する規格性はない。第V章第(2)節では、統計データを提示。

Aタイプ:元和～寛永年間に広く使用された矢穴。近世城郭の石垣石切り出しに使われることが多く、初現は慶長年間に遡る。a: 8～12cm、b: 5cm前後、c: 6～10cm。断面は矩形のものも存在するが、多くは逆台形を呈し、矢穴底を平坦に仕上げることが多い。V章(2)節で後論する「古Aタイプ」〔藤川1998・2005〕とは、弁別しておく。

Bタイプ:確認例がきわめて少なく、使用時期については、特定するに至っていない。全体形状はAタイプに類似するが、矢穴開口部の法量はAタイプとCタイプの中間の様相を示している。深さがみられる点も大きな特徴。V章(2)節で再び取り上げたい。

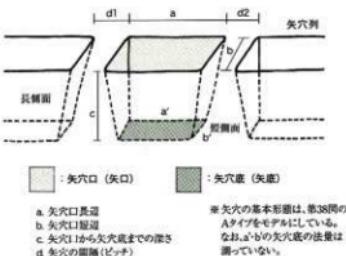
Cタイプ:近世中頃以降、現代まで見られる矢穴である。形状はAタイプに相似するものや、矢穴口と矢穴底のa寸法とa'寸法が同じ形態のものなどいくつか細別が可能である。a: 6cm未満、b: 4～5cm、c: 6cm未満。このタイプは用途・時期とともに多種多様であり、所属時期の判明する類例の増加によって、今後、型式内の編年の研究も可能である。

Dタイプ:近・現代の小割りに用いられた矢穴である。a: 3cm未満、b: 3cm未満。断面形状は四角や、円柱状を呈するものがあり、機械による矢穴痕も含める。

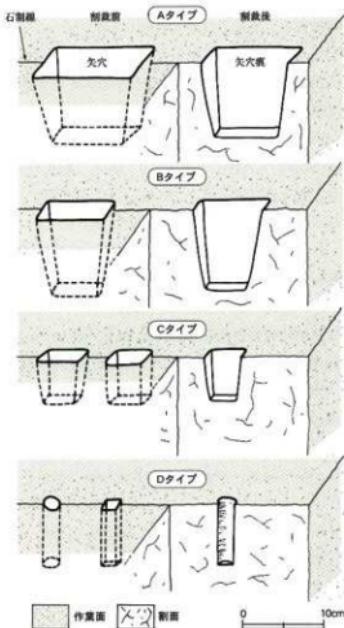
東六甲採石場の調査では、現在のところ以上4つのタイプ分けがなされており、本書の記述もこれに拠る。ただし、V章では、これに藤川祐作氏が近年注目する「古Aタイプ」〔藤川1998・2005〕を追加し、年代や系譜関係を整理する。

なお、最近報告された兵庫県高砂市竜山採石跡では、近世以降の石切技術に関する用語や概念を石工技術者から聞き取り、説明を加えているが〔北垣2005b、清水2005b〕、比較的慣用しやすい術語については選択的に使用し、一部漢字に直して以下のような理解で報文中に用いることとする。

矢穴は対象岩石面を正面ととらえ、開口部を「矢口」、もしくは「矢穴口」と呼ぶ。矩形をなす矢口の大きさの計測では、長辺をa、短辺をbとして示す。矢穴口から矢穴底までの深さはcとする(第37図)。「矢穴彫り」には幾種かのノミが使用されたと思われる。竜山石切場では「刃先を短く焼入した四面刃」の「サキノミ」が第



第37図 矢穴各部の名称と法量測定基準



第38図 矢穴の基本型式分類模式図

一段階に用いられ、次に「テッカノミ」で「矢底」(ヤゾコ)近くの狭い部分を彫り広げる。矢底調整にはサキノミより一段長い「ソコウチノミ」(マルノミの一種)を用い、矢底の石屑を除去すると完成する。矢打ち(ヤウチ)は玄能・玄翁(ゲンノウ)を用いて行う〔藤原 2005b、清水 2005b、北垣 2005b〕。

矢穴のミシン目状続縫を「矢穴列」、半裁痕跡を「矢穴列痕」、その個々を「矢穴痕」と呼称する。なお、〔中村 2003〕では、割り取りラインを「矢穴線」と呼んでいる。

③ 矢穴石と矢穴痕を持つ割石と刻印石

矢穴が穿たれている状態の石材を「矢穴石」と呼ぶ。割られていないものも、亀裂の入った割り取り途上の石材も両者含めて指す。割裂後の「矢穴痕を持つ割石」とは区別する。割石とは本来多様なものであり、矢穴を使用しないものも含めて用いる。人為的削面をもつ石すべてが「削石」である。刻印石は矢穴の有無にかかわらず、刻印が彫られている石材すべてを対象とする。したがって、刻印石には、自然石・矢穴石・矢穴痕を持つ割石・コッパ(「木端」・「木片」とも書く)、並びに調整石などの各種加工段階の石材・石片が存在し、昔請工場では当然多くの多くが染石や角石・角鰐石などに供されている。しかし、石切工場に残存している刻印石も想像以上に多く、自然石や不良材にも当然認められる。

なお、彫りの彫り方には、「線彫り」と「点彫り」の技法差や時期差が指摘されているが〔藤井 1982a、森岡編 1998〕、刻印面の風化によって判断が困難な場合が多く、今回はとくに言及しない。刻印の種類は、家紋刻印・家紋省略刻印(家印)・記号刻印・人名刻印・地名刻印・数量刻印や石工組の定印などがあり、機能により、傍示刻印・担当刻印・手順刻印や产地刻印などが存在する。これとは別に作業過程に必要で彫られる「下取り線」(割り取り箇所の目安線)がある。木材加工に照らせば、墨出しと同義で、矢穴を掘る前に母岩表面や削面(打面)に矢穴列や矢穴位置を下書きした線を指す。通常、ノミやタガネで付けられる(第39図)。

④ 矢場取り(二段彫り・溝彫り・ヤバトリ)

花崗岩は表面や亀裂部が風化し易い岩質であるため、矢穴を穿つライン上の風化でもろくなったり表層部分を幅を限って強度を保つ面まで剥ぎ取る作業を行ったものが認められる。この溝彫り状の剥取工程を特化して呼ぶが、適切な考古学的用語の模索が求められる。この表層の弱い部分を「玉葱状剥離」とも呼んでいる。

⑤ 段丘疊層と選材の選択

地質年代に登場する段丘疊層の生いたちに関しては、



(a) 城山刻印群 E・F・G 地点

築石材を確保する矢穴列痕のみられる準調整石
(平成 14 年度調査、芦屋市教育委員会)

未割部分に残る下取り線(写真左下)と小面相当小口面に彫られた削取りライン位置を示す機能刻印。



(b) 城山刻印群工事立会調査で確認された
矢穴痕や下取り線を持つ石

下取り線に従っておらず、右の目を見直して改めて
削取る珍しい例。芦屋市山芦屋町 29 番地の工事現場。

第39図 矢穴石、矢穴痕をもつ割石、刻印石

地質時代 (百万年)	主な地層・できごと		日本 の列島 時代
	段丘疊層	六甲の上昇	
1.6 - 新生代	第四紀 大阪層群	海の侵入	
	新第三紀	甲山安山岩	火山の噴火
23.3 - 65.0	古第三紀 白堊紀	神戸層群 六甲花崗岩 布引花崗閃綠岩 有馬層群	古神戸湖 火山活動
146 - 208	中生代 ジュラ紀 三疊紀		透発性 隆起・浸食
		丹波層群	大陵の時代
			海の時代

第2表 地質年表 [先川 2001 から]

II-(1)でも述べているが、六甲山の形成過程のなかで、断層崖化した花崗岩体そのものが風化・侵食作用を受けることにより崩壊を進め、分解した花崗岩巨礫が礫層をなして大阪層群の上に不整合に再堆積したものである[前田 1971]。層相は花崗岩巨礫を主成となし、その大きさ 50 cm 未満のものから 1 m を超え、2 ~ 3 m に達するものまでバラエティーに富む。その他を花崗岩の風化が進行し、細粒化したマサ・砂礫層が充填して構成される。しかし、狭義の段丘礫層自体は 25 ~ 15 万年前に再堆積したものであるが、今回の発掘現場で確認している礫層すべてが、こうした初期段階に堆積した狭義の段丘礫層そのものなのか、さらにそれらが二次三次の移動堆積をくり返した年代の下る広義の段丘礫層かを層相から判断するのはきわめて困難であった。また、土石流堆積のように、明らかに流水作用による場合は、その都度層名を付して分層し、その由来を熟考したが、上記の層相を呈する場合は、二次的三次的な堆積であっても、すべてを段丘礫層と一括で呼称している。よって、本報告で使用する「段丘礫層」の記述については、地質・地形発達史の観点で把握される層相・層序の認識レベルに達していないことを断っておきたい。また、発掘の過程で矢穴痕を持つ削石、矢穴石やそれらの母岩を包含する礫層に対しても、「プライマリーな段丘礫層」や「二次堆積・三次堆積の段丘礫層」とした表記が一部見られるが、前述したように、あくまでも考古学的な現場判断・解釈により呼び分けている。

今回の発掘調査では、先に示した狭義の段丘礫層から直接母材を獲得するパターンと、二次三次の堆積をたどった広義の段丘礫層中に母材を求めるパターン、広義の段丘礫層から抜け落ち、移動した転石を母材とするパターンなど、母材の帰属する層位は複雑な実態を示す。江戸時代当時の石工の意識にその違いや認識が求められたか否かは別として、段丘礫層の分布する地質環境と丁場としての立地環境の双方が有機的に結びついた結果、横穴式石室をもつ八十塚古墳群や活発な採石活動を示す岩ヶ平刻印群が形成されたものと思われる。

以上の説明でおよそ衆知されたと考えるが、六甲山地を形づくる花崗岩の利用形態は、今のところ岩体そのものを対象とした状況は考え難いし、実際に丁場遺構としてはみつかっていない。岩石一般は温度の上下動変化により膨張と収縮をたえず繰り返す性質をもち、造岩鉱物の膨張率によって各所に隙間が生じやすく、鉱物粒の粗い花崗岩はそれらが順次はれて風化が進行する。二酸化炭素を含む水と長石が反応して粘土と化し、花崗岩全体は地表部分からマサ（真砂）化し、深層部の風化に至る場合もみられる [先山 2001d]。

既に示した「バットランド」(第 13 図)とは、マサ化して樹木が育ちにくくなった土壤で「はげ山」となった土地のこととして紹介されており、ロック・クライミング発祥の地として知られるロックガーデンもその一つであることは、踏査の経験をもつ私たちにはよく理解できる地形である。マサ化は節理に沿って風化とともに進むため、節理に即した略直方体の「サイコロ状」割れが生じやすく、土石流に流されて玉石となり、転石化した結果、採石対象の母材として有効になるわけである [先山 2003]。それらを包含する段丘礫層は、大坂城石垣用石として無数の適材を供給しており、円周度に差はある、中心部がいたって硬い岩塊が表六甲東部に集中することの意義は自然条件としては大きいものがあるだろう。

⑥ 花崗岩と採石活動

六甲山地の大部分を形成する花崗岩は、マグマが地下深くでゆっくり冷えて固まった岩石（深成岩）であり、石英・斜長石・カリ長石の 3 鉱物に加え、黒雲母が入っている。

無色透明の石英、透明感のみられる白色を呈した斜長石、淡紅色～淡赤色のカリ長石（正長石）の違いは明瞭であり、その組成率が 1 個 1 個の花崗岩の個性を表出している (図版 43 ~ 45)。先山徹氏はその量比による分類をわかりやすく説明しており [先山 2001b・2003]、石英・カリ長石・斜長石をほぼ等量含むものを狭義の「花崗岩」、斜長石が多く、カリ長石が少ないものを「花崗閃緑岩」に分類・定義する。「御影石」とは、「カリ長石が薄い桃色～紅色をしているのが特徴」とされ、その色合いと風土については、市内在住の三宅正弘氏が芦屋の街並、屋敷石垣を象徴するものとして関心を寄せている [三宅 1997]。

なお、長石の巨大化した結晶や水晶は、「ベグマタイト」と呼ばれ、今回の発掘現場でも花崗岩の一角に散見される。

六甲山地の花崗岩は、中生代白亜紀に誕生して以来、約 8,000 万年の時間が経過するが (第 2 表)、人類の利用 (採石活動) は新しく、第四紀でも大量使用は古墳時代後期を迎えてからである。

(森岡・坂田)

IV 発掘調査の成果

(1) 調査の方法と経過

今般、大規模な民間開発が予定された事業地（最終面積 27,833.31 m²）は、兵庫県芦屋市岩園町 5 番地他 24 筆にあり、地権者ウエスト・ハウス株式会社（大阪市天王寺区夕陽丘町 2-15）から提出された文化財保護法第 57 条の第 2 項に基づく発掘届出書により、開発行為に対する事前調査を実施した。事業地には分譲宅地 64 区画分が造成されるため、切土・盛土や地盤改良工法により現状が大きく変更される。既に不測の工事先行着手により、外部から搬入された盛土も厚く、周知の埋蔵文化財包蔵地として芦屋市の分布地図に登載されている 2 つの遺跡（群集墳と採石場跡）についてかなり損壊を受けていることが予測された。二転三転した事業者の変更や届出の継承不備、文化財保護を目的とした事前協議が難航して支障をきたした上、調査方法や調査地の取り扱いなど種々の点で問題が重なったため、行政・学会・地域住民・保存団体・報道関係者ともにきわめて注目度の高い発掘現場と化した。遺跡の価値や調査方法・発掘状況を視察する目的で、芦屋市や兵庫県の文化財保護審議会の専門委員による視察も行われ、2 度にわたって現況把握と意見もいただいた。発掘調査は、平成 16 年 5 月 6 日より 6 ヶ月の期間の予定で開始され、埋蔵文化財保護のための事前調査を遂行し、地権者（事業主）との調査協定書に基づき、10 月 29 日に終了した。

調査地は、27,833.31 m² の広大な面積であり、敷地内に二つの谷を含む斜面地と、段丘平坦面や近世の削平面が局所的に遺存する複雑な地形を呈しており、敷地全体を通して調査の方法も一様ではなく、調査環境や調査条件に則した最良の手法を選択するよう心掛けた。また、梅雨時期に始まったことや例年ない二桁に達する上陸台風の西日本通過もあり、防災や安全に考慮した掘削方法を探らざるを得なかったことも付記しておく。

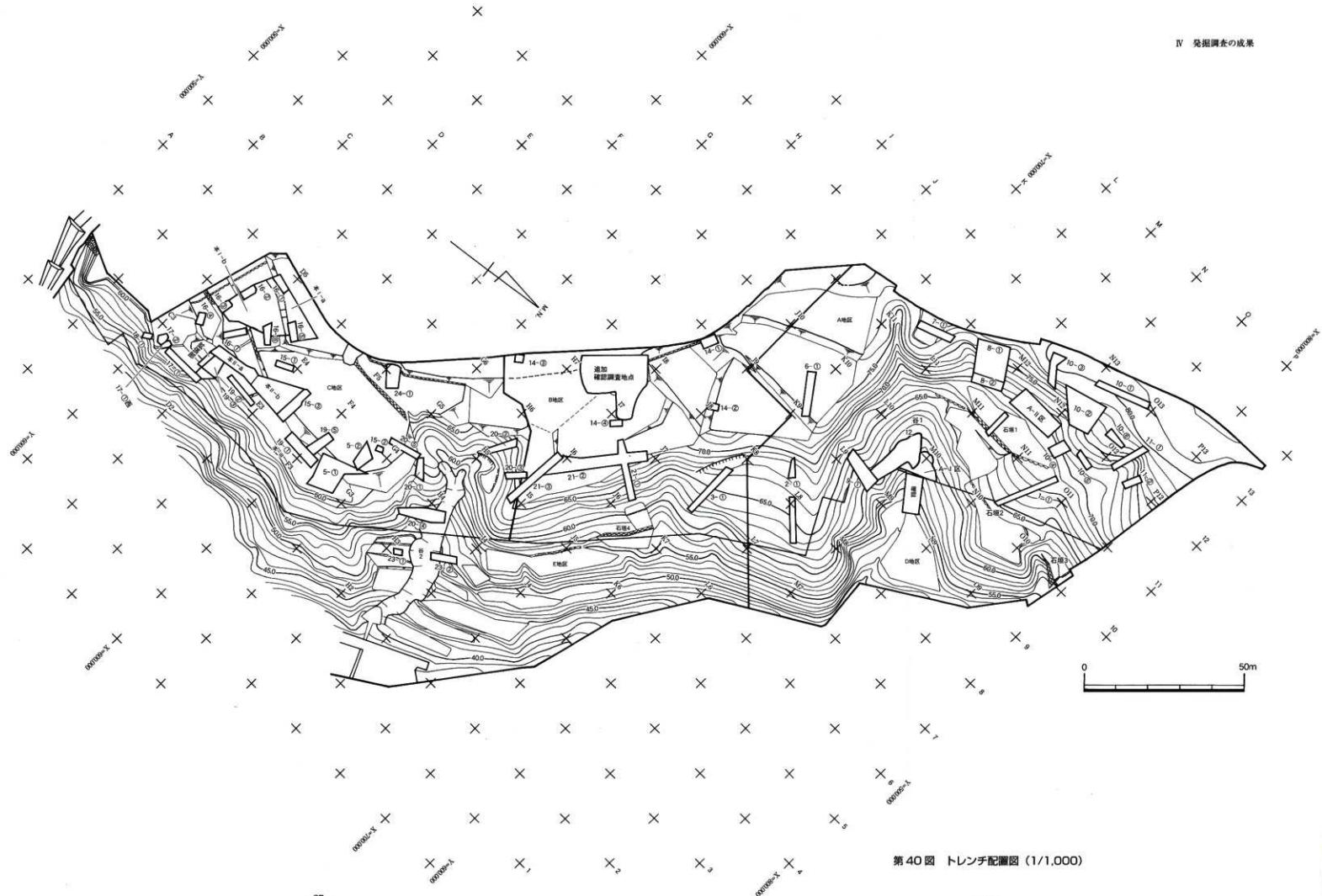
調査の方針は、第一段階として各地区に幅 2 m を基本とする長さ 10 m 前後の確認トレーニングを設定し、遺跡の有無が確認できた箇所を第二段階で本発掘調査として面的に拡幅するようにした。調査地点については、あらかじめ事業地全体に必要箇所から番号を付し、ある程度地形区分に準拠していたため、それを踏襲し、第 1・2・3・4 … 地点などと細別して呼び、さらに地点内でのトレーニング名については、主として設定順に①②③④… で表示していく。なお、発掘調査は事業地が広大で、工事工程も存在することから、最も急がれる防災工事予定区域から始められることになり、取り扱い協議の対象も自ずと限られるため、工事区域を当初、A ~ C の 3 地区に分割して実施した。そして、中間協議を経て防災工事が予定される斜面下部箇所も D・E 地区と呼称して、確認調査の対象とした。これらの調査地区 A ~ E は、地点より上のランクで、実質的には調査単位となつたため、順次確認調査の実績報告書を作成し、兵庫県教育委員会文化財行政室に提出した。本発掘調査に移行した箇所に関しては、別称を設けて地点分けと区別した（例えば、A 地区本調査第 I 区）。測量基準線は国土座標に落ちる任意の 20m メッシュを組んだ。以下、A ~ E の各地区ごとに調査の具体的方法と経過を略述する（第 40 図）。

① A 地区の現況と確認調査・本発掘調査

事業地は既述したように、広大でかつ起伏に富み、また、工事の先行着手による造成関係の搬入盛土のため、防災要件に関する制約を強く受ける土地へと変容しており、砂防・水防の観点から最も工事が急がれると判断した敷地北部約 3 分の 1 を A 地区と呼称して、範囲を限ってまず確認調査を実施した。標高は 58 ~ 85m を測る。

当地区はトレーニング方式で調査を進め、面的確認を必要と判断した部分は、あらかじめトレーニング幅を大きくとって確認調査を進めた。確認調査は地形と状況を勘案して機械掘削と人力掘削を併用して進め、危険度の高い石材の移動などには調査員・作業員共に細心の注意を払った。また、前述したように、確認調査の方法や箇所など細部にわたって兵庫県教育委員会から指導並びに助言を受けた。なお、当地区に存在する開析谷は「谷 1」と呼称する。

確認調査の結果、本地区では 2ヶ所で面的な調査が必要と判断されたため、調査区を広げて本発掘調査を行った。調査対象範囲とした 2 カ所とは、一つが谷 1 の底の巨礫・関連石材集中部（A 地区本発掘調査第 I 区、以下 A-I 区と略述する）、もう一つは谷筋中心部の北東にかけての傾斜面で、石曳き道や小規模な石切丁場が想定されるエリア（A 地区本発掘調査第 II 区、以下 A-II 区と略述する）に該当する。なお、A 地区確認調査は平成 16 年 5 月 7 日から 6 月 4 日の期間実施し、6 月 7 日付で県教育委員会文化財室宛に実績報告書を提出した。地



第40図 トレンチ配置図 (1/1,000)

区単位の遺跡の取り扱いについては該書に言及し、それを受け本発掘調査は、6月18日～9月16日の期間、他地区の調査とも並行して進め、天候や地盤のゆるみなどに十分配慮して断続的に行った。

A地区は違法行為により造成盛土が最も多く厚く撤入された場所であり、加えて本地区的自然地形の中核をなす谷1の下流側隣接敷地には西宮市公営住宅（老松団地）が存在するため、調査当初より土砂災害など防災面での指導を頻繁に受けたエリヤである。したがって、A-I区では、谷底での作業が中心となるため、造成土形成の斜面側に土嚢袋（トン袋）を2段に積み上げ、盛土の崩壊・流出と転落石の防護措置を施して調査に臨んだ。

② B地区の現況と確認調査

B地区は事業地のほぼ中央、A地区とC地区の間に位置する。当初、C地区との境は小開折谷の底、下刻線を基準に考えていたが、この谷には石切丁場が検出される可能性もあるので、事業者とも協議を行い、この谷についてはすべてをC地区の中で取り扱うこととし、B地区には含めないものとした。調査地点としては、第3・4・14・21の4地点とその東方、段丘端の急斜面が含まれることになる。標高は55～70mである。

派生尾根に位置する第3・4地点は当初古墳状隆起としていたもので、横穴式石室内蔵埴の想定を行っていたため、その確認を目的としたトレンチをそれぞれ1本ずつ設定した。古墳盛土の有無などを確かめるためである。第14地点は、段々畑に造成土が厚く盛られ、大きく現状が変更されていたため、その損壊度の確認と遺構の存否を検証するために、適度な間隔をおいてトレンチ（堅坑状）を4本設定した。また、第3・4地点間に位置する第21地点は、東向きの丘陵斜面が比較的大きな谷をもたらす西宮市側の市街地に向かって下っていく部分であり、ここにも1本のトレンチを探入してその様相を確かめた。この地点ではさらに石垣部分（石垣4）と石塊集石部を中心に2～3ヶ所表土を剥ぎ、石切丁場の存在を確かめるための確認発掘を実施している。

さらに兵庫県との協議に基づき、経過措置として第21地点で2本のトレンチを追加し、要所にて石塊露出作業を行った。結果的に第21地点には「十字」トレンチが入った。また、石垣部分は第89号石材の様態を確かめるべく、一部裏込め調査や90号石材周辺の石塊群の性状を調べた。そして、87・88号石材周辺石塊群にも確認調査の手をのばした。D地区斜面裾との境界付近に遺存した110・111号石材についても清掃と測量を行った。

③ C地区的現況と確認調査・本発掘調査

C地区的確認調査は、A地区本発掘調査とB地区確認調査の日途がつき始めた7月上旬より着手した。その間、調査成果が出始めていたので、6月28日(月)午後には研究者対象の、7月4日(日)午後には一般市民対象の現地説明会・見学会を開催し、「現地見学会ノート 横川大坂城東六甲採石場－岩ヶ平切丁場跡－」を作成、公刊し〔芦屋市教育委員会2004〕、次々米詰される数多くの見学者にも随時配布して遺跡調査と本遺跡の内容に関して理解が得られるよう啓発・普及に努めた。また、学会・文化財保存団体からの依頼にも随時応え、8月18日（全地区）や9月22日（C地区のみ）にも小見学会形式を探って、説明不十分ながら現地を可能な限り公開した。

C地区は、A地区からB地区と丘陵地を南下して最も南端に位置するが、面積はB地区より広く、ほぼA地区に匹敵する。さらにA地区同様、段丘端を開析する東西方向の大きな谷が一条あって（谷2と呼称する）、石切丁場のみならず、石材搬出を行うためのルートの存在も予測された。標高は60～85mを測る。

この谷から続く丘陵縁は概ね南北にのびるが、縁端は急傾斜して西宮市の市街地と接続する。この部分は、開発区域にしたがい裾部のE地区として分離しているため、C地区はその上部斜面一帯までを含むことになる。C地区的南端は、岩園町の住宅地と接しており、最末端では通称どんどん川を境にかなりいびつな形で事業地は収束する。この谷も石材運搬に供した主要ルートになっていた可能性は大きい。

こうした斜面地形の部分を除くと、全体として畠地であり、とくに段々畑となってつい最近まで耕作が行われていた農業用地（生産緑地）である。市内でも最後の田園景観をとどめる所として、江戸時代の新田開発以降の岩ヶ平の旧態を文字通り示す地区でもあった。事業地本地区的北西隅ではこのたびの違法な造成工事により盛土が行われ、既に旧状はわからなくなっているが、南西部の段差のみられる耕作地は、概ね旧状をよくとどめており、トレンチ探入を中心とした確認調査を順次遂行した。

確認調査は、A・B地区同様、微地形の変化、地形の小区分をとらえて地点名を与え、地点内では掘削順にトレンチ番号を付して確認のための試掘を行った。また、それに先立ち、現状地形測量が全く不十分なため、調査前の状況写真を充実に撮影した（図版8・10・11）。

確認調査地点は、第5・15～20・23・24地点の計9地点であり、主にトレント方式と一部併行して石材の露出にねらいをつけ、要所の表土剥ぎに努めた。後者の方法は、これまでの確認調査においてもきわめて有効な確認方法であることが判っており、関係石材が検出された時点でそれぞれ一定規模の広がりをもつトレントに切り換えた部分がある。後に考察するが、当時の採石段階の石運びがこれに近い方法で行われた可能性もある。

以上的方法で行った確認調査の結果を受け、本発掘調査が必要と判断された箇所を適宜絞り込み、C地区本発掘調査第I区、C地区本発掘調査第II区、C地区本発掘調査第III区の計3地区（以下、C-I区・C-II区・C-III区と略す）を既往のトレントの情報を基に拡張していく形で本発掘の対象とした。

C-I区は事業地南西端の確認調査第16地点の段差にみられる耕作地を対象とし、多数の遺物の処分に困難をきわめることが予想される上、中段間の石垣については、現地に残す形で調査区を二分した。本地区では、既述したように確認調査第16地点①～③トレントにおいて、石切丁場の存在をうかがわせる元和～寛永期の矢穴痕のみられる石材が多数確認されている。また、確認調査第16地点⑥トレントでは溝状遺構や炉状施設の一部が確認されている。これらの性格や実態を明らかにすることを目的とした。なお、調査区は上段耕作面をC-I A区、中・下段耕作面をC-I B区とさらに細別して呼称することにした。発掘方法は重機掘削を行った後、石材の露呈作業など人力掘削により調査を進めた。C-I B区にみられた段差（畦）は、終盤に改削した。

C-II区は、第15・17・19地点の一部をそれぞれ包括する大きな段差から広い耕作面にかけての地域で、主として包含層や土器の出土、配石溝が確認された部分の性格や遺構確認を目的として設定した。本地区は南北で地層や検出遺構の様相が異なるため、2つに分割して調査区を設定し、南側をC-II A区、北側をC-II B区と呼ぶ。II A区は第17地点①トレント、第19地点②～④トレントを中心とする調査区であり、古墳確認部分を中心に重機掘削を行い、他は要所を人力掘削しつつ調査を進めた。II B区は、第15地点③トレントを解消する方向で包含層近くのレベルまで重機掘削を行い、包含層を人力により掘った。この調査区の平面形態は直角三角形を呈するようになった。当区では焼土や灰を伴う機能不明の土坑群が江戸時代の地層より検出された。

C-III区は、第19地点⑤トレントを解消する形で略正方形に拡張する調査区設定の計画を立てたが、遺憾ながら第19地点①トレントの背面の一部と深部を精査するにとどまった。調査は主として人力掘削で進めた。

この間、調査最終段階の平成16年10月28日には、兵庫県教育委員会文化財室による調査終了立会を受けるとともに、同日、学会・市民・研究者の来跡者には指示により人数制限の下、発掘現場を公開した。調査工程上、最後となった当地区的本発掘調査は、平成16年10月29日、開発事業者とかわした協定どおり終了した。

④ D地区の現況と確認調査

D地区の確認調査は、西宮市公営住宅老松団地2号棟に向かって下るA地区谷筋の開口部において、工事が予定されている擁壁・階段状土留め工事予定域を対象として行なった。防災の上から調査範囲は、谷の主軸に平行するトレントを1本探し入するのみの最小限にとどめた。

D地区における確認調査は、一部これまでの排土の除去から始められ、幅約5m、長さ約20mの確認トレントをおよそ東西方向に2段階に分けて設定して行った。A地区的関係石材の出土状況からみて、谷底D地区一帯にかけての遺構の連続性は疑う余地がなかったため、確認調査にはバックホー(0.25立米)を用いつつも慎重を期し、重機にかかる石材の個々は、矢穴の存在や重量、出土層位などに留意しつつ排除と移動を繰り返し、とくに絶えることのない谷筋の豊富な流水と泥、さらに溜っていた伐木片やはびこる根に悩ましながら作業を遂行した。そして、矢穴石や矢穴痕をもつ削石については、できる限り原出土位置から動かさないよう検出し、その後に隨時手掘りと表面の水洗いを加えて一石ずつの性格や出土の意味を検討した。とくに、東端では確認の不足を補うため、幅5m、長さ10.5mで谷底部をさらに深堀し、谷開口部付近での堆積過程などの状況を確かめた。なお、D地区の調査区は標高50～60mを測る低所に設定されたことになる。

⑤ E地区の現況と確認調査

E地区は、段丘面が大部分を占めるC地区の段丘崖斜面下、眼下に見下ろす西宮市の市街地に接続する丘陵の裾地一帯であり、標高50m前後を計測する。E地区は事業地全体の中では基本的には大部分が緑地として保全される部分であり、宅地の下水の排水などを集水する貯水池が築造される計画が示されている。事前調査としてこの箇所を確認調査の対象とし、遺構・遺物を確認した場合は、工事損壊部分に限って本発掘調査を実施すること

とした。また、この箇所については、調査地点番号を追加し、新たに第23地点と呼称することとした。

確認トレンチの設定場所は、谷2の谷底下刻部分を除いて南・北の対向斜面とし、南側に1本、北側に1本の計2トレンチをほぼ連続する形で南北方向に設けることとした。谷底部には流水の道をカットすることになるため、トレンチを設けることを見送ったが、一部気にかかる石材の露頭があったので、それについては伐採木を取り除き、矢穴・刻印の有無を調べた。各トレンチは重機の入る余地が無いため、表土から人力で掘り下げ、写真記録や土層断面図をとった。探入トレンチは少ないが、ほぼ所期の目的は達成した。
(森岡・坂田)

(2) 調査日誌抄録

日々の調査経過については、発掘調査を担当した森岡・坂田の調査日誌を森岡日誌を核に据えて合成、要約し、以下に天候の記録とともに記述する。

2004.5.6 (木) 晴れ時々曇り

計画図に基づき、もっとも工事を急ぐA地区の確認トレンチ設定作業から調査を開始する。トレンチ設定のため、杭打ち。第8・10・11地点などで作業を進める。作業員がいないため、発掘作業は停止し、残余の時間を利用して、地点単位に遺物の表面採集などを行う。

2004.5.10 (月) 雨

雨天のため、調査は中止し、事業者と防災工事と調査工程との打ち合わせを行う。

2004.5.11 (火) 曇りのち時々晴れ

各調査地点のトレンチの設定作業を続行する。本日よりトレンチの掘削作業に入る。第11地点から確認発掘を開始し、①・②トレンチ（本節では、以下トレンチ名に限り「トレ」と略称する場合がある。）の表土除去、客土除去作業を行う。続いて第10地点②トレも表土を除去する。

2004.5.12 (水) 曇れ

確認調査のトレンチ確認調査続行。第11地点①トレは、盛土と判明した部分のうち、南半は深いので重機で掘削する。南端付近、現地表下2.75mで大阪層群の上面を検出、1.80m以下には淡緑灰色シルト質土層が遺存する。北半部では採石のための石材深度を探索する土坑を検出。写真撮影まで行う。第11地点②トレは、やはり盛土が多いと判断されたため、重機を入れて掘削。現地表下1.85mの所で青灰黄色土の盛土層を確認した。深掘したトレンチはすべて埋め戻した。

第10地点④トレは、矢穴痕を持つ割石周辺の検証を行

目指して、表土を剥ぎ、矢穴痕を持つ割石の矢穴列などを露呈させ、写真撮影。第10地点⑤トレも設定部分の雜木の除去を行う。第1地点①トレは沈砂池の設営予定地で急ぐため機械掘削を行い、大阪層群を浅い位置で検出する。第9地点はトレンチを掘りつつ、矢穴痕を持つ割石41・42号石材の略図を作成する。本日から遠藤建設が樹木の撤出を行うことに決まる。

2004.5.13 (木) 雨

前線の通過で終日雨。現場の調査坑への影響も出そうである。補助員は実測図の補正など内業を行う。兵庫県教委の視察があるため、作業員7名待機。伐木の撤出は行う。

2004.5.14 (金) 晴れ

昨日の雨が嘘のように晴れあがった。主としてトレンチの作業を続行し、一部地形測量を行う。第1地点①トレは東方へ延長し、昨日検出された大阪層群の続きを確認する。大阪層群は急崖面をなして下降し、トレンチの東端では厚い堆積物が乗る。遺物包含層はない。第9地点①トレはほぼ完掘し、石材の露呈状況を写真撮影する。第10地点④トレは矢穴痕を持つ割石周辺の清掃をほぼ終了。⑤トレは石室様の石の露呈があったため、当初より大きく掘り広げたが、大阪層群がすぐ露呈したため、古墳の可能性は薄れた。第10地点②トレの表土剥ぎを開始する。第11地点①トレは遺構を平板実測し、北壁の土層断面実測図を作成する。また、縮尺1/50で地形測量を行う。

2004.5.17 (月) 雨

朝方、雨のため、1日中発掘作業は中止し、写真・図面



第41図 発掘開始当初の様子（第10地点、北から）



第42図 地形測量風景（第11地点、南から）

などの整理・内業を行う。兵庫県教育委員会文化財室と連絡をとり、降雨のため、防災関係の指導日程を調整する。

2004.5.18 (火) 一日中曇り

第1地点①トレは、壁面の清掃・整形を行う。第8地点①トレは全面的に表土を剥ぎ、1石のみ矢穴痕を持つ割石(端石)を確認する。検出状況の写真撮影。その周辺では、石材の探査で矢穴痕を持つ割石2石を新たに検出する。第10地点③トレは本日より表土剥ぎを開始。②トレは北から表土剥ぎを継続する。第10地点⑤トレは、設定部分のなかで地山を目指して掘り下げる。石造品の一部が出土する。京都市の山村薦氏来訪。広い現場を見て、驚く。

2004.5.19 (水) 曇りのち雨

午前を中心で作業を行う。矢穴痕を持つ割石44・46号石材の平面・断面略図を作成。発掘作業は第10地点②トレのみ表土剥ぎを継続。他は石垣列に矢穴痕を持つ割石が多く含まれるため、石材の露出作業を行ふ。石組には近世・近代の両方の矢穴(A・Cタイプ)がみられ、自然石と知覚石によって粗雑に積み上げられている。

2004.5.21 (金) 台風2号通過のため中止

朝一番で、兵庫県教育委員会文化財室の岡崎課長補佐来訪。当現場の行政指導を受ける。発掘方法など協議。

2004.5.24 (月) 快晴

第1地点は①トレの上層を分層し、水準測量を行って、上層断面図を作成する。第9地点は、矢穴痕を持つ割石がさらに検出され、原位置での探石活動を物証づけるものが検出された。第10地点⑤トレは、石材間の土砂をとり、精査に入る。第③トレは表土除去を継続。谷筋の上部は小振りな石材が多いが、1石1矢穴痕を持つ割石の存否を吟味する。

2004.5.25 (火) 曙れ

朝方、2段になっている石垣1・2の前面に集められていていた伐開集積木の移動をバッカホーにて行う。さらに石垣の構造を露呈し、一部上昇部分の入口を確認する。第8地点上方のゴミ処理および樹木伐開木の撤去作業を行う。また44~47号石材周辺の清掃発掘を続ける。第9地点周辺の矢穴痕を持つ割石探索では、Aタイプ矢穴痕を持つ割石は合計4石となる。この地点の谷底斜面で採石活動を行っていることがほぼ確実となる。石材調査を開始する。12~19・22~23号石材を終える。3号石材の平面図・立面図・断面図を作成した(縮尺1/10)。

MBSテレビ(毎日放送テレビ)から連絡。学会関係者5月27日に来られる予定との連絡あり。

2004.5.26 (水) 曙れ

第2・6の二地点に新たに確認トレンチを設定。重機を用いて掘削する。6地点部分の工事盛土はかなり分厚い。明日、土層断面整理の予定。第1地点はトレンチの土層図ができたため、沈砂池の掘削工事に入り、完成する。石材の実測は、3号石材が午前中の早い段階に完了したので、49・50号石材の平面図・断面図作成を行う。51・52・53号石材の周辺は谷あいにかけてさらに掘り進める。夕刻、白谷嘱託と損壊確認段階の石材番号との照合作業を行う。

2004.5.27 (木) 曙りのち晴れ

遺物探査と各トレの石材清掃を指示。第9地点の谷間は石材の測量と発掘を続行する。49・50号石材のセクショ

ン図作成。基準点測量を安西工業に依頼して実施。午前11時、毎日放送三澤氏現地取材。鈴木重治氏(日本考古学協会埋文委員)・百瀬正恒氏(日本考古学協会理事)・中村博司館長(大阪城天守閣)来跡。遺跡の状況視察。

2004.5.28 (金) 曙れ

朝日・毎日・産経・神戸の各新聞社が朝刊に、昨日の学会関係の現地視察内容を一齊報道する。本日から第7地点①トレの掘削。これは伝承墳の1墳の確認を目的とする。第10地点①トレの第2層以下の掘削を再開する。第6地点①トレの北壁土層断面図作成、完了する。兵庫県教育委員会岡崎課長補佐来訪。確認調査状況の指導と学会来路の件で協議する。土地の境界問題についても指導を受ける。

2004.5.31 (月) くもりのち雨

作業員停止。補助員と担当者のみ現場に入る。

第6地点①トレ土層断面図作成完了。第2地点①トレの土層断面実測開始。未完。降雨が予想され、補助員の作業を午前で撤収させ。確認調査報告作成続行。

2004.6.1 (火) 曙れ

第3地点①トレの掘削を開始した。古墳状隆起と推定された場所であり、尾根筋に沿って突端部を起点に南北2m×東西18mで設定した。第7地点第①トレの東壁土層図(GL-2.7mまで確認)を実測し、安全確保のため、すぐに埋め戻す。第8地点の礫集積状況の撮影。この礫集積は近・現代の建築残材の可能性も考えられる。断ち割りトレンチを設定する。礫は20cm大のものが多く、六甲南麓では見かけない岩質である。第10地点③トレは南西方向へ拡張し、石敷の広がりを調べた。矢穴痕を持つ割石53号石材の実測図を作成。藤川祐作氏来跡。

2004.6.2 (水) 曙れときどき曇り

早朝から、毎日新聞社と読光新聞社の本調査紹介記事で急遽連載とともに、ウエスト・ハウス㈱を交えて今後の調査進行協議を行う。第3地点に新しく確認調査したトレンチの所見を点検し、大阪層群と段丘礫層の境界部分をトレンチ内で確認する。第2地点①トレと第3地点古墳状隆起確認トレンチ間の斜面地で確認された矢穴痕を持つ割石周辺を精査。第2調査地点はトレンチ北壁の土層断面図の記述を完成する。また、第21地点で東西方向の確認トレを新しく設定。規模は、2m×17m(斜距離)で設定し、先ずは表土剥ぎから行った。矢穴痕を持つ割石51号石材の実測を始める。矢穴痕を持つ割石53号石材の実測図の記述作業を行う。第10~11地点間の伐木の移動処理を行う。辻 康男氏(パリノサーヴェイ㈱)来跡。教示に多謝。

2004.6.3 (木) 曙りのち晴れ

本日から、昨日の協議に基づき、本発掘調査に向けての防災工事(トン袋の流砂区域柵への設置作業)を開始する。午後3時前には斜面のシート張りを含め作業を完了する。第3地点の南東斜面部の下草刈り、斜面部露呈作業。第10~11地点側の伐木を午前中に終え、この部分で新たに古墳状隆起1つが確認されたため、尾根地形を横断する形で南北トレンチを設定、掘り始める。第10地点①トレは両端と中央の3ヶ所で約4mずつ深掘し、段丘礫層面まで掘り下げる。遺構・遺物の確認に努める。同③トレは南拡張区を含めて写真撮影し、石敷を追って北側へも拡張する。

この拡張区では暗渠風の石詰は二段に分かれるようである。第21地点①トレの確認調査続行。斜面掘部に降りてくる。なお、1日かけてトレンチ配置図（縮尺1/500）を測距する。ほぼ完了。

2004.6.4 (金) 晴れ

本日は、兵庫県との中间協議の結果、石垣1の確認トレンチを設定。一部重機を使いつつ掘削する。先日から開始した第10地点⑥トレは掘削を継続する。今とのところこの隆起も古墳ではなさそうである。第2地点は実測が完了したので、本日砂池を計画どおり掘削する。土中から出てくる新たな石材に注意を払う。10地点③トレは北拡張区の石敷を精査し、捲乱部2～3ヶ所を取り除く。また、石敷の性格を追求するため、一部にサブトレンチを設定し、掘り下げる。第21地点①トレの精査。石塊が密集する部分があり、斜面掘に2段積みの石垣を検出。石垣4の基底石にAタイプの矢穴痕を持つ割石を確認した。東端をさらに2m強度へ延長し、平坦部の性格を調べる。経過写真を撮る。さらに斜面下の石垣をもつ平坦面にも2本の跡を残して、石垣基部とその平坦地を大阪層群（地山）まで下げる。

2004.6.7 (月) 曇り一時雨のち晴れ

天候の関係で作業員を止めたが、降雨は激しい雨が数分みられたのみであった。第12地点の矢穴痕を持つ割石52号石材を補助員が実測するのに作業はとどめた。午後からは、三条事務所において内業を行う。

2004.6.8 (火) 雨のち曇り

降雨のため、現地作業中止。三条事務所にて確認調査(A地区)の実績報告書を作成。夕方本府へ持参。

2004.6.9 (水) 晴れ

西川課長、兵庫県教育委員会文化財室に出張。A地区的確認調査結果に基づき、本発掘調査の調査範囲協議。2日のプランクを経て確認調査の詰め作業を行う。第10地点の調査をサブトレンチなど深掘を中心進めめる。③トレは、北半の敷石が搅乱されていることが判明したため、石材を撤去しつつ掘り下げる。また、サブトレンチを深掘し、段丘疊層面を追う。④トレは、作業平坦面の旧地形を把握するためにT字状のテストトレンチを掘り下げる。⑥トレは段丘疊層の地山面に到達する。上面には拳大の石塊が広がる。第21地点の調査は、本日も継続。石垣1背面のトレは南側半分を70cm幅で裏込めをみるため深掘したが、山側には段丘疊層と大阪層群の存在を確認する。A地区石垣

1前面も掘り下げる。①トレは、南側斜面の石塊露頭部の表土剥ぎを行い、羅層からの遺産した石を含め、多数埋没していることを確認する。斜面掘で矢穴をもつ裁断石を発見。石材実測は43号石を行なう。概ね終了か。

2004.6.10 (木) 曇りのち晴れ

本日よりA地区の本発掘調査に入る。0.25立米の重機を第9地点に入れ。トレンチ中央に残していた仮道部分から堆土を開始。この付近のほとんどの石は50cm程度のもので振りなものが多い。第9地点中央部より寛永通宝銭1点と昭和38年鉄造の10円玉1点が出土。表土直下では瓦片1点出土。近世の堆積土に入っているからは焼石らしき長縄三日月形の石が出土する。

10地点③トレは断ち割りトレンチおよび捲乱土除去後の石敷を撮影。①トレも完掘後の写真撮影完了。②トレのT字テストトレンチについても完掘写真撮影完了。⑥トレ発掘状況撮影。石組1處込みトレンチ完掘状況撮影。その後、西壁上層断面実測図作成。第8～10地点間に新たに本発掘の調査区（A-II区）を設定し、掘削を開始した。矢穴痕を持つ割石43号石材の実測は完了。石垣1の断ち割りトレンチの上層図作成にとりかかる。

2004.6.11 (金) 雨一時晴り

雨天のため作業を中止した。スライドの整理や図面のトース・整理作業などを実行。内業に終始する。

2004.6.14 (月) 晴れ

石垣1の上層断面図作成継続。完了。註記作業も終える。土層図作成は第10地点①トレ西壁・③トレなどをとり終える。発掘作業は、本発掘の2調査区に焦点を絞る。第9地点①トレで検出された矢穴痕のみられる端石は下端部に矢穴跡が存在するため、もう少し掘り下げたところ、また矢穴痕のみられる石材が出土。周囲にはコッパもあるため、写真撮影。さらに西へ石を追い、腐蝕土レベル以上の石を排除していくと、腐蝕土層内から昭和42年発行の五円玉1枚が出土する。

2004.6.15 (火) 晴れ

第10地点①トレ西壁実測終了。②トレT字サブトレの土層断面図も本日実測を完了する。本発掘A-I区の方は第10地点の拡張を進める。午後、大型の矢穴痕を持つ割石1石検出。周囲の巨石もワイヤーを用いて引っぱりあげる。第8～10地点間のA-II区は、表土剥ぎを終えるが、とくに矢穴痕を持つ割石の検出はなかった。

県会議員、市会議員数名来路。遺跡への関心は高い。

2004.6.16 (水) 快晴

昨日にひき続き晴天。今週は梅雨なれど天候に恵まれている。土層図は昨日の続きで、第10地点⑥トレ西壁の実測作業。さらに①～③トレ土層図の註記作業を行う。本発掘はA-I・IIの両地区に分かれて調査区の拡大と検出部分の精査。明日、文化庁記念物課来跡予定。第12調査地点において、矢穴痕をもつ小割石材出土。これについては、今後の発掘深度の関係もあり、重機で移動させた。夕方までに矢穴痕を持つ割石82号石材の一端を検出する。

2004.6.17 (木) 曇りのち晴れ

本日は、2つの本調査区のうち上手側のA-I区は4～5名で南端部のトレンチ間残余部分を掘り進め、あとの作業員全員は下手側の第12調査地点に入り、重機掘削の後



第43図 日本国考古学会の発掘現場視察

を追いつつ、矢穴痕を持つ割石 82 号石材周辺の盛土から発掘を続ける。矢穴痕を持つ割石 82 の全容が出土。暗黄色土の内に収まる。この層上 2m は土壌層や雜木類、瓦礫、粘土ブロックなどが無秩序に混じる盛土で厚い。76 ~ 82 号の石材に番号を振り、76・77 号石材の平面実測を行う。

また一方で、遠藤建設と打ち合わせを行い、第 12 調査地点谷の北側斜面に放置されている伐木の移動処理を川端重機上木㈱が行う。これで対向斜面発掘の準備も始まった。

午後 1 時 30 分より、兵庫県教委平田主査の調査指導。大和システムの現場も指導があり、その後、浄水場・電團・中央道の刻印石保存場所も参考のため視察してもらう。

2004.6.18 (金) 晴れのち曇り

第 8 ~ 10 地点間の本発掘は本日で一応終了。第 12 調査地点はさらに西へ進み、矢穴痕を持つ割石が新たに 3 石出土。うち 2 石 (84・85 号石材) は表土内から出土したため石垣 1 のテラス部分に移設。矢穴痕を持つ割石 81 号石材実測。平面図を絵える。写真も撮った。

2004.6.21 (月) 雨、風強し

台風 6 号、近畿地方通過のため、朝方発掘現場を点検し、作業は停止。内業で現況準備作業などに入る。

2004.6.22 (火) 曇れ

台風一過で、第 12 地点は砂泥で埋没していたため、朝一番から除去作業に着手した。当トレンチでは大阪層群と段丘疊層の不整合面が確認できる。大阪層群がプライマリーなものか、ブロック土なのか現時点では判断できない。新しく見つかった矢穴痕を持つ割石 3 石は 83・84・85 とし、移動石材を 84・85 とする。石材間に順次振り下げる、さらに西へと進む。北側斜面の発掘も 2 日目。矢穴痕を持つ割石がこのエリアで初めて見つかる。矢穴痕を持つ割石 81 号石材の立面図・断面図の実測を継続。追加で申請された A 地区の東側斜面地域 (D 地区) の仕様書を作成する。

2004.6.23 (水) 曇り

83 号石材を中心に撮影し、北側斜面検出の 86 号石材の写真撮影と計測を行う。北側斜面は石が全体に小振りである。矢穴痕を持つ割石 81 の実測完了・註記。A - I 区 (第 12 地点) で出土した 84・85 号石材の水洗いを行う。

2004.6.24 (木) 曇り

三条事務所にて説明会資料の作成指示。A - I 区の西壁断面の整形と精査。矢穴痕を持つ割石 84・85 号石材の実測を行い、同一石材であることが判明した。作業員の一部は、A 地区を中心に安全確保のため土階段を造る。午後 2 時、日本考古学協会の百瀬理事、鈴木文委員視察。9 人中、4 人の作業員を現況要員とすることを決める。

2004.6.25 (金) 雨

雨天のため作業中止。ただし、室内資料整理を行う。

2004.6.28 (月) 曇り一時晴れ

A - II 区の深掘トレの掘削を行う。ここでは、重機と人力で、トレンチ内に点在する巨礫 (転石のみ) を除去した。石材実測は、84・85 石材 2 石を中心に行う。B 地区第 4 地点①トレ設定。古墳状隆起が見られ、先ず表土剥ぎを行う。GL-1m 剥削したが、礫層が握りあがらない。明日、再検討をする。

2004.6.29 (火) 曇りのち晴れ

石材実測は 83 号石材の平面・断面図が完了し、86 号石材平面実測へ移行する。B 地区第 4 地点①トレは、トレンチ壁面および深掘箇所の整理を行う。本日より C 地区刻印石周辺の確認トレンチを現況対応として急遽あける。4 m × 15 m の南北トレ 1 本を設定し、土手 1 ヶ所を残して表土と盛土を掘り下げる。

2004.6.30 (水) 晴れ

石材実測は 86 号石材を行い、夕方からは谷底の A - I 区の石材出土状況図をスケール 100 分の 1 で測量開始。第 4 地点①トレは掘削作業を終了。C 地区刻印石部分に入れたトレンチ (第 19 地点①トレ) では、次々と矢穴痕を持つ割石材が確認され、一応トレンチ内の表土除去を終える。その間、石材別にコッパを回収、また、矢穴痕のみられる石材の出土を確認する。若干ではあるが、表土直下より初めて磁器類が出土した。

午後 1 時、山中健芦屋市長、総務部長、秘書課長など市長部局関係者が発掘現場を視察する。午後 1 時 30 分、報道関係者による A 地区を中心とする発掘調査結果を公表、現地を公開する。午後 3 時、安西工業株式会社の村井所長並びに現場監督と森岡・坂田で、現地説明会当日の順路、危険地域の安全対策、見学路造造の工法などおよその打ち合わせを行い、予算との絡みで明日からの工程を決定する。

北垣聰一郎先生から鉄製矢 (前鳥にて入手) の貸出提供の連絡が入ったため、森岡・竹村・坂田で山張の検討を行う。

2004.7.1 (木) 晴れ

現地説明会準備第 1 日目。作業員 15 名勤員。見学コースの確保が厳しい現場となっているが、危険区域に留意しつつ、本日時点で確認された石材を可能なだけ見えてもらうよう最大限配慮する。土階段・手すりの設営開始。A - I 区の平面図 (縮尺 1/100) が完了し、B 地区トレンチ配置図の作成開始。

2004.7.2 (金) 曇りのち晴れ

A 地区 54 号石材の平面図を作成し、84・85 号石材の註記を行う。

現地説明会準備第 2 日目。作業員 20 名勤員。見学コースの設営を終える。広い現場なので、説明手順を考える。

午後、立命館大学の和田晴吾教授が同大学文学部 4 回生中西君 (石造物研究) とともに、両現場を視察する。

2004.7.4 (日) 晴れのち曇り、夕方一時雨

午前中、現地説明会の準備作業を行う。コースの最終点検と説明表示板の各種を取り付ける。午後 2 時から、竹村・白谷の担当する六龍莊町現場と合同で説明会を開始。両説明会の参加人員は 280 名を数える。

2004.7.5 (月) 曇りのち晴れ

雨を予測し、一日作業を停止する。三条事務所での室内作業は一部選択的に進める。

2004.7.6 (火) 晴れ

D 地区に重機を降ろすための車路の造成を行う。B 地区盛土部分にトレンチ 4 ヶ所設定し (第 14 地点)、重機を用いて掘り下げる。そのうち、①トレンチは崩壊が激しいため、その日のうちに埋め戻す。87 号石材実測を完了する。最高気温が 35℃ を上回るようになる。体力的に厳しい一日。C 地区を中心に竹林などの伐木作業を行う。

2004.7.7 (水) 晴れ

C地区を中心に草刈り作業、伐木作業を統け、耕作地にトレンチを設定。明日から掘り始める予定。B地区の確認トレンチで、上層柱状図の作成を開始。C地区 19 地点①トレは2層目の層を掘り下げつつ、コッパ集塊部を検出したため、その面で止める。遺構面として認識できる。

2004.7.8 (木) 晴れ

気温上昇するも、風がかなりあって体は幾分楽な一日。B地区は確認調査トレの土層図作成に終始する。埋め戻したトレンチ以外は土層固完了。A地区は今後の発掘の予定と重機の搬路を決定する。89号石材実測、完了。

C地区は、刻印石の所在する 19 地点①トレを南・北両区に分け、江戸時代初期の作業面を目指して表土直下の黄色土層まで掘り下げる。南区では表土から 10 cm に追加 20 cm の深さまで掘り進む。この小区にはコッパは少ない。北区は刻印のある 91 号石材南下と 92 号石材南端でコッパ面を確認。北区北側ではイリヤモ染付磁器盤の小片とコッパが出土。93 号石材の西側には大きな石材端が出土し始める。16 地点は、本日より確認調査を開始。②～③トレの耕作土層を剥ぎ終える。その後、サブトレを抜いて下層の確認を行う。本日は D 地区の調査・整理費の見積書を作成する。

2004.7.9 (金) 晴れ

東大阪市文化財保護協会の松田順一郎氏から来路の旨、伝言あり。C地区第 16 地点②トレは表土直下の写真撮影を行い、西側にサブトレを入れ、耕盤を掘り下げる。第 16 地点③トレは幅 35 cm の西側サブトレ内を確認。裸多く、地山に近い様相もあったため、トレンチ全体の耕盤を掘り下げる。また、第 16 地点①トレの辺りを草刈りし、トレンチの設定を行う。第 19 地点①トレのサブトレは、土層断面を参考にしつつ、コッパ面まで全体を掘り下げ続行。南区は表層部分 20～25 cm を約 3 分の 2 刈り、残り全区を掘り進める。遺物の出土はない。北区で北端寄りの所で瓦片 1 と磁器片 1 が出土。土手寄りの石は基盤で大きく広がりをもつ巨石であることが判明する。また、午後には土師器片 1 点も出土する。本日、87～92 号石材まで番号を振る。石材実測は 89 号を行う。90 号も実測を開始。

テレビ・ラジオの天気予報は最近当たらず。本日の天候も予想外であった。

2004.7.12 (月) 曇り一時雨

7月 10 日土曜日の雷を伴う豪雨により、各調査区は土

砂の流入と壁面の傷みが著しい。午前中は、各地区とも土抜きの作業や壁面の整理などに追われる。A地区本調査区は、人力を中心に矢穴痕を持つ削石などの精査に入る。C タイプ矢穴痕をもつ 1 石をさらに谷下で確認する。水仕舞いが難しくなってきた。浮いている石材の移設を指示する。B地区第 21 地点①トレの北壁土層断面実測図を作成し、終える。89 号石材の平面図を作成する。

C 地区、16 地点②・③トレで、耕土直下より矢穴痕をもつ石材が出土する。予想外の状況のため、①トレを追加設定し、さらに岩ヶ平遺跡との関係を見る。第 19 地点①トレは、降雨のため、砂泥土の処理、清掃を行い、写真撮影に備える。コッパや土器類は思ったほど影響を受けていなかった。土が柔らかくなったのを機会に、94 号石材の全容を出すため、調査区を一部拡張する。

2004.7.13 (火) うす曇りのち晴れ

本日、近畿地方の梅雨が明ける。昨年が 8 月 1 日だったので、かなり早い梅雨明けとなつた。雨の日の少ない東の間の梅雨だったよう思う。

A 地区本調査区は、谷底の機械掘削を継続して行う。水量が多くて作業が遅々として進まない。また、掘削土量が予想以上に膨らむことから、再度、調査面積の検討が必要になる。B 地区第 4 地点①トレの北壁土層断面実測図をトランシットで作成する。記録を残して完成。C 地区第 19 地点①トレは土層断面を含めた完全清掃に入る。サブトレ底にはヘドロが多い。第 16 地点①トレでは包含層および落ち込み造構を確認。第 16 地点④トレも作業員を入れて人力で掘り下げていく。

午前 10 時、伊井孝雄・葛野豊・佐久間貴士・川口宏海の各氏来路。遺跡調査の現況を観察し、B・C 地区の方も見学される。保存すべき遺跡であることを力説される。

2004.7.14 (水) 晴れ

梅雨明けとともに夏空が広がり、炎天下作業が続く。しかし、新潟県三条市などの水害は目にあるものがあった。

A 地区谷筋は、開口部に向かって、重機を用いて後退掘削を統一し、石材と地山の大坂層群を露出させる。上部では矢穴痕をもつ削石が多く、本日段階で、106～109 の 4 石を確認している。これらは、いずれも 86 号石材より下のレベルに位置し、これより以下では逆に矢穴痕を有する石が少なく、円磨度の高い巨石が多く、谷の底にあたる部分でも次々と玉石が出土する。午後から、A-I 区の大型カメラ



第 44 図 2004 年 6 月 28 日の現地説明会



第 45 図 2004 年 7 月 4 日の現地説明会

撮影に向けて雨水により流入した土砂の排土作業を行う。

B 地区第4地点①トレ土層図の註記。C 地区第16地点①トレは、4 層下部、深度 75 cmから掘削開始。南西隅に黄褐色粘土の土塊をもつち込み状の遺構と東壁断面に包含層を確認。中世段階前後の遺物を含むようである。第16地点②・③トレは石材および段丘面露呈状況を再確認し、②トレの石材に 97・98・99、103・104、③トレの石材に 100・101・102 の通し番号を付す。②・③トレでは、A・C タイプの矢穴痕を持つ割石が出土している。④トレは表土下 70 cmからさらに掘削を始める。第19地点①トレは、本日より石材の出土状況などの実測に入る。

なお、本日から確認調査を開始した第16地点③トレの床土直下からは凹凸無基式の打製石墻 1 点が出土した。

気温は午前中の早い段階で 30°C を超える。午後、市教育委員会高島社会教育部长が西川文化財課長と来訪。兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の山上雅弘氏来訪。現地を見学。夜、石切丁場や城郭の意見交換。

2004.7.15 (木) 晴れ

相変わらずの厳しい夏日で、朝から日差しが強い。本日は写真家の梅原章一氏が石切丁場の遠景写真撮影のため、来訪。作業を行う。知人のこうした助けが心強い。

A 地区本調査区は谷底に溜まった泥と排出土の積み直しを行う。B 地区は、実績報告原稿作成のため担当者のみ立ち入り、追加注記などをおこなう。C 地区第19地点①トレは、10 cm 盛りの測量枠を入れて、補助員 2 名で、コッパや遺物の出土平面図を作成する。第16地点は、②・③トレはそのままにし、①・④トレを掘り進める。①トレは石塊少なく、稀薄な包含層らしき褐色粘土質の厚みがかなりある。④トレは矢穴をもつ石材ではなく、ランダムに小石塊が群れをなす。

午後 4 時から、本庁にて事業者のエスト・ハウス株式会社、波藤建設と D 地区などの扱いに間に、調査中間協議。

2004.7.16 (金) 晴れ

A・B 地区は担当者のみ立ち入り、作業員は C 地区に從事する。第16地点④トレの完掘状況の撮影を行う。⑥トレの設定を行い発掘開始。石塊が頬をみせ始め、浮かし掘りで進める。第17地点①トレや 8 地点のトレーンチ設定を行。第19地点①トレでは、矢穴痕を持つ割石 91 および周辺コッパ面の実測およびレベル測定。91 号石材は中途で終わる。第19地点では、②トレの設定予備作業を進める。

2004.7.19 (月) 晴れ

「海の日」のため作業を中止した。福井県の水害、大丈夫だろうかと福井県埋蔵文化財センターの友を気遣う。

2004.7.20 (火) 晴れ

東京で 39.0°C 以上を記録する猛暑日となる。B 地区はトレーンチの配置図を作成する。第16地点⑤トレは貴灰褐色粘土を掘り下げ、下層の確認。C 地区第17地点および第18地点についてもトレーンチを入れ、確認調査を開始する。第17地点①トレでは矢穴痕を持つ割石およびコッパが多く出土し始める。第18地点①トレでは、山地と見しき淡赤褐色土層の勾配をつかむ。第19地点①トレにおいて矢穴痕を持つ割石 91・92・93 号石材およびコッパ面の平面図作成続行。コッパにはレベル高を入れる。

2004.7.21 (水) 晴れのち曇りのち雷雨

本日より暑さのため、体憩中間時にも小休憩時間を持つこととした。第15地点①トレは、東側テストトレーンチを参考にグレー層を日指して 10~15 cm 全体掘削に入る。第16地点①トレは、1 m 強掘り下げた時点で、南東隅の落ち込みは地形変化である可能性が出てきた。第⑤トレは、黄褐色土の除去を行う。第16地点⑥トレは南半分の掘削に入る。自然石は西側に多いようである。⑦トレは表土下面で草津、導水路を検出した。第17地点①トレは、西縁崖部の竹藪の根を含む表層土を除去する。第18地点①トレは、北端部の褐色砂礫層を地山ととらえ、南半部へと違う。南西隅には大阪層群が確認された。第19地点①トレは、平面図作成続行。同②トレは、調査区部分の伐木、ゴミの移動処理を重機によって行う。

本日は土用の丑の日であり、甲府で 40.4°C の猛暑を記録した。東京は 38.5°C を観測する。関西地方 35~36°C の酷暑の状況が続き、熱中症が増える。1994 年の炎暑以来、10 年ぶりのきわめて暑い夏である。猛暑の夏は忘れ難い。

2004.7.22 (木) 晴れ

大暑の日らしく、大阪地方の最高気温は 35.0°C を記録した。これで真夏日が 10 日間連続している。太平洋高気圧の強さが原因であるが、おそらくこの 10 年で最高の気温を記録しているであろう。本当に暑い。

C 地区第19地点①トレの 93 号石材とサブトレーンチ土層断面の実測。第18地点の掘削もほぼ終盤を迎える。

兵庫県平田主査来跡。現場の要所を見学。

2004.7.23 (金) 快晴

暑さは心もち体に対し楽になっている。が、今日だけのことかもしれない。湿度 23% の低さがおそらく原因だろう。C 地区のみに重点を置いていた調査を続ける。確認トレは、本日新たに第16地点⑦トレ（長さ 8 m）を加える。このトレは設定後、午後掘り始めめる。第16地点①トレは、西壁沿いを深掘りし、自然石塊の含み具合を確かめる。深度 140 cm。このトレは地形の変化点に相当するのであろう。第16地点②・③・④トレは本日も放置する。第16地点⑤トレは、深度 55~60 cm から掘削、北端で枯り氣のある土層を確認。遺物の出土はない。夕方、北東隅に落ち込みを確認。第16地点⑥トレは、本日は凍結。巨礫に矢穴痕をもつものはみられない。第16地点⑦トレは本日設定して表土を剥ぐ。田畠耕作に伴う痕跡と段差下に溝を検出。

第17地点①トレは、西から A・B・C に分割して発掘。C 区で拳大から人頭大の礫を含む「V」字状暗渠を検出。このため、東西方向に第19地点③トレを設定し、平面での状況を調べ始める。表土除去。第18地点①トレは、舞ね地山の裏層面で発掘完了。深度は 22 m。南東隅、旧表土直下 2 層より江戸時代の土師器皿出土。旧表土、地山ともに地形変化による勾配をみせ、15~2 m 大の巨石も二、三露出する。コッパ小 3、中 2 出土。写真撮影、掘削完了状態撮影済。第19地点③トレは、斜面の整理を行いつつ、石材を露出させる。重機で撤去した 113・114 号石材以外に、石垣用に組み込まれた 118 号石材、剖面から矢穴列を予測して重機で転倒させた石材を 115 号石とする。第19地点①トレは平面図の作業続行。がんばらねばならない。

B 地区の確認調査実績報告書を完成させる。

2004.7.26 (月) 晴れ

C 地区第16地点⑤トレは、北壁が崩落しており、北西隅の構造査を中止し、壁面の復旧に取り掛かる。午後から溝埋土の掘削を開始した。第16地点⑥トレは、表土直下で犁溝を確認した。第16地点⑦トレも表土直下で犁溝を検出し、段差下端で排水路を確認した。第19地点③トレは、表土除去後、下面で精査し記録撮影を行った。94号石材の実測を終了した。

2004.7.27 (火) 晴れ

C 地区第16地点⑨トレで検出した構の平面・断面図を作成し、南壁際にサブトレンチを抜いた第17地点①トレは北よりの織集積部分の精査。夕方に写真撮影を行った。第18地点①トレは、西・南壁面の実測を行った。遺跡めぐりハイクの下見に来られた久保氏（兵庫県民会館職員）来跡。

2004.7.28 (水) 晴れのち時雨

午前中、C 地区谷筋の調査のための段取りを打ち合わせる。谷降下車路の造成には一定量の土が必要となり、土取り場の先行トレンチ 2m × 2m の小トレンチを 1ヶ所設定した。第16地点①トレは北半を深く掘ったところで矢穴痕を持つ割石 1 石検出。第16地点②・③・④トレは放置する。第16地点⑤トレは北半の構造遺構を掘りきり、断面で確認する。第16地点⑦トレは深度 1 m 前後まで掘り下げる。ようやく段丘疊層起源の石材が顔を出し始める。水は出ない。北壁に落ち込みらしきものあり。

第17地点①トレは C 地区の暗渠を中心に清掃発掘する。第18地点①トレは土層図注記。第19地点①トレは平面実測作業続行。第19地点②トレは礫の偏在する段丘疊層面を検出。さらに北側には 50 cm 前後の高さの小石垣を写真撮影（清掃前）。第19地点③トレを新設し、配石溝を平面的に追った。投入された石材を全く部分がみられる。表土直下で、須恵器片を検出。近くに古墳があるのか？

2004.7.29 (木) 晴れ

本日は熱射がきついが、台風 10 号が近づいてきたため、風がある。ただし熱風で作業はつらい。

第16地点①トレは段丘疊層の間に矢穴をもつものが確認された。第16地点②・③・④トレは作業を停止したまま本日も進入せず。第16地点⑤トレは深部でようやく段丘疊層上面に達した模様。第15地点①トレ、第16地点⑥トレは作業を行っていない。第16地点⑦トレも深度が下がり、地山らしき面に達する。第17地点①トレは排水溝配石の清掃を中心に行う。第17地点①トレで、一部平面図と対応する遺物の取り上げを行う。第19地点北方丘陵端の伐木類の移動、整理。新たに石塊を検出。第19地点③トレは排水溝の肩を検証しつつ内部を掘る。上部に溝の重複があるようだ。ベース層で須恵器片 2 点出土、この排水溝は古墳と関係する可能性も出てくる。

夕方、閏文協の伊井孝雄・葛野義・佐久間貴士の 3 氏来跡。C 地区を中心に現場の状況を見学する。

2004.7.30 (金) 晴れのち曇り一時雨

台風 10 号接近のため、現場作業を休みとする。補助員の多くも休みをとって休養してもらう。内業のみ実施。

2004.8.2 (月) 晴れ

台風 10 号は、四国・中国地方に上陸、通過した。第 5

地点には新たにトレンチを 1 本設定し、表土を剥ぎ始める。斜面下方でも要所に巨石が存在するようである。①トレ東端には小段差が認められ、石垣が存在する。第5地点南部について、周辺の伐木を取り除き、石材集中部を中心で確認を行う。伐採後、段差面を中心で現況写真を撮影する。巨石 1 個が顔をのぞかせる。第19地点①トレは、石材の断面実測続行。第19地点②トレに直交して確認を続けた第19地点③トレは、深度 40 cm で段丘疊層上面に達した。ちょうど段丘支尾根の上頂面に相当し、40 ~ 50 cm の礫と拳大～人頭大石の分布が多い。この深度からの須恵器の出土はない。第19地点③トレは南張区で新しい溝を確認するが、明瞭な識別は保留とする。この溝が古墳に伴う排水溝のようなものであるかどうかは、今後慎重な確認が必要だ。第16地点は、①トレがほぼ完掘状況を写真撮影。⑤トレは分層後、壁面の写真撮影を行う。

渡辺武大阪城天守閣名譽館長来跡の予定であったが、来られず、葛野・伊井両氏（関西文化財保存全国協議会）と市会議員木下氏が来られ、現場を視察する。

2004.8.3 (火) 晴れのち曇り一時小雨

午前中、三条調査事務所に奈良県立櫻原考古学研究所指導研究員奥田尚氏（大阪市立大学地球科学研究室）来跡され、午後には現場に入ってきた。花崗岩を中心とする岩石の石質鑑定などを依頼。夕方までに A 地区を中心に終える。協力に多謝。調査は第16地点①トレの土層断面実測作業に入る。第5地点はトレンチの調査と石材を中心に表土を掘り抜け、C タイプで亀裂まで生じた矢穴痕を持つ割石 1 石を確認した。

夕刻、市本課から B・D 地区の確認調査実績報告書の内容について、県教委文化財室が指導ありとの連絡が入ったため、森岡・坂田本庁へ向かい、県教委からの指摘事項を検討する。千葉県東邦高等学校山岸良二先生、考古研生徒 11 名を率いて訪問。関東地方からの来跡者に一同感激して、説明も一層熱心に行った。みんな感動のようす。

2004.8.4 (水) 曇り

半日以上の雨天が予想されたため、本日の現地作業は停止する。天候不順で、調査の今後の計画が心配。

2004.8.5 (木) 雨のち曇り

台風 11 号通過のため、現場作業は中断。昨日発生した突發台風である。今年は本当に台風が多い。

2004.8.16 (月) 晴れ

盆明け調査再開。作業員は本日も盆休みのため、急ぐ D 地区の新検出石材（105・108・109 号石材）の実測作業を中心で進める。第16地点⑤トレの土層注記を行う。

2004.8.17 (火) 曇りのち雨

午前中、C 地区を中心に水の汲み出しやトレンチの清掃を行い、並行して D 地区の谷 1 穂断面の実測作業を進める。降雨のため、午後は三条事務所にて内業。

2004.8.18 (水) 曇りのち晴れ一時雨

最近の降雨で水没や傷みの激しいトレンチの清掃などを行なう。D 地区の谷 1 穂断面の実測作業を進める。午後 2 時、4 学会主催の第 2 回目の現地見学会があり、渡辺武大阪城天守閣館長や村川行弘芦屋市文化財保護審議会委員来跡。参加者市民約 40 名。調査をしつつ、市民への説明は行なう。

2004.8.19 (木) 曇りのち曇り時々雨

作業員は、台風15号影響の降雨が予測されたため中止し、補助員のみD地区を中心に石材分布図などの実測作業を行う。体に疲労が目立ち始める。

午前11時、阪神南県民局長、松下兵庫県教委文化財室長、同室岡崎課長補佐、藤原芦屋市教育長、西川文化財課長一行現地入り。全体の説明を行う予定であったが、降雨厳しく、A地区・D地区を中心に同行説明してのち、事務所にて保存協議など一定の対応策について詰める。午後3時前、文化庁岡田康弘記念物調査官が県教委平主室岡行の上、来跡。担当者の森岡が現地全体をみた上で、行政指導を受ける。本日、文全協葛野豊氏、関文協伊井孝雄氏より、保存要望書の提出があった(芦屋市長、芦屋市教育長宛)。

2004.8.20 (金) 曇り一時雨のち晴れ

今週の散発的な降雨により、各トレーニングに滞った雨水が多く、C地区を中心に排水作業と清掃を行う。C地区では、他に第16地点の段差間に存在する石積みを振り出し、矢穴の有無を検証する。Cタイプが多い。

第19地点④トレは北壁にサブトレを入れ、やや深部でサスカイト片を検出。壁面を写真撮影する。

第5地点①トレは、斜面部に石垣や溝などを検出。大阪層群の上昇を概ね確認し、その上に段丘隕層がるる地質構造。C地区谷頭あたりから、本格的な確認に向けて草木の伐採を行う。D地区の石材分布図を作成の、実測は第16地点①トレの土層図の続きをを行う。B・D地区の本发掘調査に向けて、監督作業員と発掘箇所、方法について打ち合わせを行う。夕方、西川文化財課長より兵庫県教委へ市文化財審議会の意向を打診して欲しい旨、連絡が入る。

2004.8.23 (月) 雨一時曇り

午前から雨が降り、作業は中止。ただし、午後2時頃、石野博信氏(兵庫県文化財保護審議会会長)ら香芝市二上山博物館技術嘱託一行来跡。さらに文全協の伊井孝雄氏、関文協の葛野豊氏も来跡。西川文化財課長も来跡したので、A・D地区を中心に発掘現場を見たのち、コンテナハウスの中で、遺跡の性格や調査方法をめぐって意見交換を行う。午後3時30分頃、三条調査事務所にひきあげ、石野氏らに最近の市内出土遺物などをみてもらう。

2004.8.24 (火) 曇り一時雨

降雨が予想されたため、作業停止。三条調査事務所にて内業を行なう。図面や記録写真の整理を行う。

2004.8.25 (水) 曇りのち晴れ

大和システム(平野郎)現場の保存石材移築協議の一部修正が起り、当現場の問題としても受け止めること。

B地区では数ヶ所に分散して巨礫を中心とする段丘斜面礫の性状確認に努める。今のところ顕著な矢穴を持つ割石の存在は確認されていない。石垣4については、矢穴をもつ石材の裏側を削除して石材の大きさ、形態とともに裏込め上の様相を確かめる。46号石材の隣に122号石材が出土し、マーキングした。C地区は、補助員で調査区配置図の調査。他にC地区では、作業員1名で石垣付近北斜面の草木伐採だけ続行。他はD地区とB地区の本发掘を軸道にのせる。D地区谷底は、東西方向に調査区を降ろし、Cタイプの矢穴底を持つ割石1石の他、かなり小振りの石

が出土することを確認。大阪層群は比較的水平の状態で谷底では存在するようである。

2004.8.26 (木) 曇り一時晴れ

D地区谷底の本发掘続行。B地区には第21地点にての本发掘に向け、下草刈りと調査区の設定。トレーニングは①トレと直交させ、T字形とする。C地区は補助員のみ第16地点②トレから平面図作成に着手。B地区の斜面域も調査区を広げる方向で作業を行う。

2004.8.27 (金) 晴れのち曇り

本日は、県・市による文化財審議会のため、刻印右関係の拓本を急速採択。第19地点①トレ地点の91号石材と第17地点①トレの116号石材をそれぞれ2枚ずつ採択する。C地区の測量は、第16地点②トレ平面図を行なうが、完成しない。レベル測定など残す。B地区は21地点の南北トレをL字からT字として、表上剥ぎを行う。D地区は東へ調査区の幅を維持しつつ振り下げる。大阪層群は下るようだ。西川課長来跡。

本日、神戸新聞朝刊に保存団体からの要望が紹介され、神戸新聞夕刊の全国版(文化欄)に大阪城と世界遺産の話題が掲載されていた。

2004.8.29 (日) 晴れ時々曇り

守る会主催の石材ルートを歩く集いに一市民として参加。岩国町を出発して老松町から塙石町までの石材搬出コースを歩く催しが行われた。市民約80名参加。

2004.8.30 (月) 曇りのち晴れ

台風16号が九州に接近、その影響がまず風に始める。本日中に上陸し、中国・四国地方にも風雨はもたらされるであろう。気をつけなければいけない。

B地区は石垣4の断ち割りトレの掘削を進める。C地区は第16地点②トレの平面図(第97~99・103・104号石材を含む範囲)を作成した。

D地区谷底面の検出作業を行う。ベース層と考えていた粘土層は、二次堆積であることが判明し、サブトレを抜いて検証する。西川文化財課長来跡。

2004.8.31 (火) 晴れ

高潮台風となった16号は、本州中国地方を抜け、日本海を進んで北海道へ上陸。現場は、仮眠などがぐらついたり、斜めに倒れる。復旧する。第16地点④トレは、石材が小振りで矢穴底を持つ割石はなかった。小トレーニングを入れ、大阪層群と縦層との関係をみる。

B地区石垣4は、前トレーニングを披瀝拡張し、江戸時代の旧上層帯まで振り下げる。矢穴はないものの、巨石1石が露呈。写真撮影する。第21地点②トレの表土面下の黄灰土色混じり粗粒砂から、サスカイト剥片が1点出土した。

2004.9.1 (水) 晴れ時々曇り

西宮市民より、調査地内北西端に矢穴石があるとの情報提供を受け確認に行く。遠日からは確かに矢穴に見えたが、間近で観察した結果、大阪層群露頭面に苔が生じ、一見花崗岩のような風体になっているものであった。

B地区石垣4の追加実測。第21地点②トレの完掘と、北壁の分層。C地区第16地点③トレの土層断面と④トレの平面実測。D地区谷底の検出作業を継続する。

2004.9.2 (木) 曇り時々雨のちうす曇り

第16地点④トレの平面図や土層図を仕上げる。B地区、D地区のトレの深掘は続行。B地区第21地点②トレは、第4地点につなげ、尾根の形成過程を確認した。C地区北斜面および南斜面にトレーンチを新たに設定する。谷頭斜面の状況を確かめるためである。石垣部分は石垣6を中心清掃発掘を行う。

午後2時～6時、芦原市文化財保護審議会委員の現地観察・多瀬敏樹・村川行弘・神木哲男の3委員来訪。

2004.9.3 (金) 晴れ

C地区石垣6は最も長く弧状を描いて、谷頭方向へと曲がる。この石垣は1m大から拳大ぐらいまでの用材の不揃いさが目立つが、積み方は比較的整正である。今のところ矢穴は認められない。石垣5までの背面は拳大の疊と小疊が均質に含まれる地層をなす。谷頭北斜面の第20地点②トレの確認調査を開始する。東端から掘削する。大阪層群らしき地層が浅い位置に観察されるが、Cタイプの矢穴痕を持つ割石も出土。検討を必要とする。石垣4の前面拡幅トレーンチは、土層断面図の作成に入る。第21地点の南北トレーンチは、表土下の掘り下げるも進み、段丘稜層中の巨疊が顔を出し始める。D地区の調査は断面を含め、トレーンチ内の整理と清掃を行い、写真撮影する。遠藤建設の前田氏とC地区を中心に切土と盛土など、工事方法の予定について打ち合わせ、造構への損傷が加わるかどうかを見究める。道路面から14m程は盛土オンリーになるかもしれないが、それ以外はランマーによる転圧と3m以上の深さの地盤改良が加わるということであった。実測は石材110・111号の前面作成を行う。削石方法がよく判る。

伊井氏・葛野氏来路。西川課長から市民の守る会が県庁前で遺跡保存を訴えるビラ配りを行っていたことの報告あり。

2004.9.6 (月) 晴れ

兵庫県文化財保護審議会委員の観察は、9月10日に延期となる連絡がある。B地区第21地点②トレは、西に3m延長して段丘稜層の堆積状況と矢穴石の有無を確認する。D地区谷底は、南壁の成形と巨疊転落の防護措置を行う。E地区の110・111号石材の尖端を完了した。

2004.9.7 (火) 曇り

今度は台風18号が北部九州通過中で、コースが近畿地方直撃ではないものの、午後からは風が急速に強まってくる。またしても陸上台風の影響だ。

B地区丘陵上に入れた十字トレは、ある程度の深部に達し、巨疊の包含具合などが判明し始めた。その間、一部巨疊の露出が予測されたところを部分掘りしたが、この箇所ではAタイプの矢穴痕をもつ石材が確認された。C地区的谷合い斜面地では、トレーンチ内に石垣6の延長部を検出。遺棄した石材は移動したが、Cタイプの矢穴をもつものが多い。D地区谷底部の南壁上層断面図を作成。

2004.9.8 (水) 晴れ時々曇り

B地区石垣4トレ中央に横たわる巨疊の遺構・性状を確認した。覆土に遺物は含まれない。第21地点②トレは、上位の疊を順番に上げ、下層確認に着手した。C地区谷左岸では部分的に表土剥ぎを行い、次の作業に備える。

2004.9.9 (木) 晴れ

B地区石垣4の確認トレーンチの巨疊確認の続き。第21

地点②トレは、ほぼ上位の巨疊の取り上げが終了し、下層の剥出しを行う。トレーンチ配置図の作成。C地区谷左岸の表土剥ぎの続きをを行う。作業の遅れ目立つ。

2004.9.10 (金) 曇り一時雨

雨天のため、発掘調査終日停止。

2004.9.11 (土) 晴れのち曇り一時雨

土曜日であるが、通常どおり発掘調査を実施。本日は、午後1時30分、兵庫県文化財保護審議会考古部会小委員会の石野博信・寺澤知子両氏が現地視察。各トレーンチの清掃とシート開けを行う。A地区から石材写真を撮影。A・B地区の矢穴石を、地図に落とす作業を行う。D地区の木質遺物の精査。石野・寺澤両委員からの指導あり。

2004.9.13 (月) 晴れ時々曇り

A・B・Dの3地区的調査期限があと3日間となつたための確認調査を開始する。東端から掘削する。大阪層群らしき地層が浅い位置に観察されるが、Cタイプの矢穴痕を持つ割石も出土。検討を必要とする。石垣4の前面拡幅トレーンチは、土層断面図の作成に入る。第21地点の南北トレーンチは、表土下の掘り下げるも進み、段丘稜層中の巨疊が顔を出し始める。D地区の調査は断面を含め、トレーンチ内の整理と清掃を行い、写真撮影する。遠藤建設の前田氏とC地区を中心に切土と盛土など、工事方法の予定について打ち合わせ、造構への損傷が加わるかどうかを見究める。道路面から14m程は盛土オンリーになるかもしれないが、それ以外はランマーによる転圧と3m以上の深さの地盤改良が加わることであった。実測は石材110・111号の前面作成を行う。削石方法がよく判る。

午後から、神戸市立博物館の富山学委員とフランク考古学者のソルボンヌ大学、大阪大学考古学研究室のロラン・ネスブルス氏が応接に来て、拓本をとってくれる。一部指導を行う。重機を用いてA地区石曳き遺想定域を掘り始めると、大阪層群が出てくる。来援者に感謝。

2004.9.14 (火) 晴れ時々曇り一時雷雨

黒田一氏から遺跡状況に関する連絡が入る。人と自然の博物館 先山徹氏へ来跡依頼の連絡を入れる。16日午前に米糠の予定。花崗岩の様相を詳しく知りたいものだ。

土層図の残務は、A-I区東壁上層図の作成と註記作業を行う。谷底で出土した木材の取り上げ。採拓作業は、3号石材から進め。3号のうち、42号、76号石材の順に拓影を残す。雷雨で大影響が出る。A地区を中心に石材基底を調べるための小トレーンチを探入する。これも本日昼頃の大雨で大破、再度の復旧作業となる。さらにD地区谷底も水没し、板加工材が一時行方不明となる。排水をしつつ再確認することとする。正午以降の雷雨は、阪神間でかなり影響があったようだ。

2004.9.15 (水) 快晴

快晴。本日は雨の心配はまずなさそうだ。拓本は、42・76号石材を完成させ、午後からは77号石材を対象とする。石材関係の土層トレーンチは53号、81号、82号、50号などに設定。断ち割り土層図を作成する。53号石材の脇下から125号石材が新出する。A-II区北壁土層断面図作成。D地区谷底水没部分の木製品などはすべて取り除く。

2004.9.16 (木) 晴れ時々曇り

C地区第15地点③トレ設定。重機で表土を剥ぐ。谷頭で1ヶ所確認調査。3.5mぐらいまでの深さ産業廃棄物が出土。拓本作業は、89・90号石材を対象とする。

午後、人と自然の博物館先山徹先生来路。別の現場とともに花崗岩全般の傾向や滲透率などをみてもらう。また、パリノ・サーヴェイエ社の辻康男氏来路。遺跡全体を再踏査。

夕方、本序にて高島社会教育部長と打ち合わせあり。

2004.9.17 (金) 曇りのち晴れ一時雨

C 地区第 15 地点③トレ、勧業とサブトレンチ深掘。壁上より若干の陶磁器片出土。谷筋上方谷頭部分の確認調査で出てきた産廃は埋め戻し、その北側で新たにレンチを設定する。A - II 区調査区南方の石曳き道想定域の石材実測。折本は 44・45・46 号石材へと進める。文字刻印らしきものが認められる 45 号石材は、採掘を慎重に進める。

午後遅くに財団古代学協会の掘内明博氏来訪。A・B・D 地区の工事期限などについて心配をかける。

2004.9.21 (月) 晴れ

本日から担当者以外は C 地区のみの調査となる。B 地区 87 号石材の採石土坑の写真撮影と注記。C 地区第 15 地点③トレは北壁際にサブトレを抜き、堆積状況を確認した。壁面で須恵器片を 1 点検出した。第 20 地点第①トレ西端で GL. - 80 cm で大阪層群上面を確認した。谷上流域にトレレンチを設定するも、産業廃棄物が大量に投棄されているようである。発掘は難航。

2004.9.22 (水) 曇り

午後 2 時より研究者・保存団体の見学会があり、30 名程の来館者がいた。

C 地区第 15 地点第③トレは、耕土から 10 ~ 15 cm の標記じりシルト混じり中粒砂を掘削。第 17 地点①トレ標記書き溝の平面図（縮尺 1/10）の作成。第 20 地点①トレは、大阪層群の検出を目標として掘り進める。A 地区谷 1 より河床勾配が急峻で、谷幅が狭いようだ。②トレはゴミの大半を取り上げることができ、ようやく地面が顔を出してきた。

2004.9.23 (木)

祝日のため作業中止。

2004.9.24 (金) 雨

雨天のため作業中止。日が足りない。

2004.9.27 (月) 雨のち曇り

午前中、雨天のため待機。午後から、第 15 地点第③トレの耕作土・床土・耕鑿層を取り除き、写真撮影を行った。第 20 地点①トレは、石垣最下段に見える大阪層群の上面まで掘り下げる。第 20 地点②トレと石垣 6 の連続性を確かめるため掘削を続ける。

2004.9.28 (火) 雨

午前中、雨が激しく、ほとんど作業ができない。午後、第 15 地点を中心にトレレンチ掘削を進める。午前、C 地区

の発掘計画に関して、約 1 時間、現地を移動しつつ、森岡・坂田と遠藤建設㈱、安西工業株式会社と打ち合わせる。いよいよ、調査も大詰めを迎えてきた。

C 地区谷斜面地に 2ヶ所のトレレンチを追加、重機掘削を始める。第 19 地点③トレの排水溝の平面図を作成開始、第 15 地点③トレ、第 17 地点第②トレ、第 19 地点⑤トレなどの発掘作業を進め、確認を怠ぐ。西川氏（中村石材株式会社）来路。

2004.9.29 (水) 雨のち曇り

台風 21 号九州接近で雨のため作業停止。本当に今年は上陸台風が多発する。内業を進める。午後 5 時 30 分以降は、担当森岡防災のため、夜間職場待機となる。

夕方、高島部長の県民局問い合わせの結果と、A・B・D 地区に関する芦屋市の方針を受ける。この方針は、ウエスト・ハウス側にも伝えられ、この 3 地区の調査に関しては、防災工事施行計画書に沿う防災対策が講じられることとなり、本日をもってすべての発掘調査は打ち切られることとなった。2004.9.30 (木) 曇りのち晴れ

台風 21 号は大阪湾に入り、昨夜のうちに近畿地方を総断。午前中はその影響で一部雨も降る。

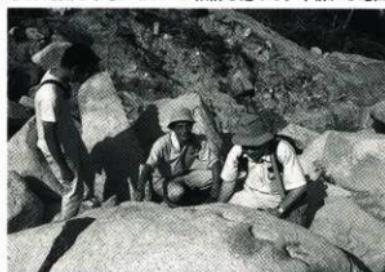
C 地区の各トレは満水状況となる。排水に順次追われ、実績報告の現場作業も本日から始める。第 19 地点③トレ、第 17 地点③トレ排水溝の実測や第 19 地点④トレの土層図などを作成、壁などが崩落したため、第 15 地点③トレの須恵器片（大型甕）や焼土塊を取り上げる。第 20 地点④・⑤トレの確認調査を行う。第 19 地点第③、第 20 地点②・③トレの確認作業も続けて行く。

老松園地の住民の方々から工事などに関する説明不足の苦情あり。圃地の方へ森岡・坂田両名と遠藤建設の前田氏含め 3 名が参り、事情を聴取するとともに説明した。

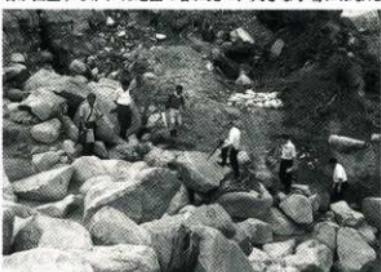
2004.10.1 (金) 快晴

風もさわやかで、暑さがおさまり、秋晴れを実感する一日であった。台風のあとでの静けさが現場に漂る。

第 15 地点③トレの須恵器大型甕縁部を含んだ包含層を掘り下げ、白色小甕を混じえた褐色ベースを出す。この包含層は東端の小自然石の石垣と関係するかもしれない。少なくとも江戸時代初期以前の年代と推定している。第 20 地点④トレはかなり重機で掘り下げ、大阪層群の下刻状況を確認する。C タイプの矢穴痕を持つ割石若干と自然石が出土するが、A 地区の谷に比べ、大きな丁場にはまだ



第 46 図 先山徹氏による花崗岩の観察指導



第 47 図 芦屋市教育長の発掘現場視察

当たらない。第20地点⑤トレスは表土を除去し、耕盤の耕作痕を写真撮影。斜面域も表土を剥ぐ。表土・耕土直下から弥生土器片、磁器片や瓦片が出土する。

測量は終日、新設トレスの配置図や旧配置図の点検などをを行う。夕方、高島社会教育部長とB地区に限っての工事立会前倒しの方策の良否について協議する。

2004.10.4 (月) 晴れ

第15地点③トレスは須恵器包含層の掘削。明日の実測準備にかかる。第20地点④トレスは、谷底を確認し傾斜面が掘れてきた。第20地点③トレスは表土剥ぎが完了し、段丘疊層の二次堆積層の掘り下げに着手した。本課より、C地区の確認調査実績報告書を10月6日までに提出することの指示・連絡が入る。残業しつつ、報文作成を急ぐ。

2004.10.5 (火) 雨

雨天のため調査中止。

2004.10.6 (水) 晴れ

本日はE地区確認のため、草木の伐採作業を開始。谷底を避けて2ヶ所を予定する。C地区については、第20地点③トレス層の分層、断面土層図作成、第20地点④トレス北垣部分清掃発掘。第20地点⑤トレス掘り下げ、大阪層群の人の為的掘削痕検出。第15地点③トレスもベース面まで掘り下げ、土層断面の実測に着手した。第18地点①トレスを安全上埋め戻した。竹村学芸員、C地区全体を見学に来訪。C地区実績報告書を県教委へ提出。

2004.10.7 (木) 晴れのち曇り

E地区に南北方向のトレンチを設定。2ヶ所設定する計画で、1本目の発掘を開始。C-III区土層図の作成継続。第20地点④トレス北垣土層部分の精査。第20地点⑤トレスは谷斜面部のトレンチ端において、「V」字状の溝状遺構検出。下層部の埋土からレンガ片が出土するので、かなり新しい時期のものかもしれない。第17地点②トレスは、石塊間を深掘する。E地区的トレンチ配置図の作成を行う。

神戸市教委の山手幹線現場にて現況の打ち合わせを行う。業平遺跡で縄文土器や古墳も出てきた。忙しい。

2004.10.8 (金) 雨

台風22号接近のため、少々風が強まり、雨が降り始めた。作業を終日停止し、三条整理事務所で整理作業。

2004.10.9 (土) 雨

台風22号通過のため、登庁。防災体制により、午前7時~11時、本庁文化財課にて防災待機する。

2004.10.11 (月) 晴れ

祝日で作業中止。作業の遅れで落ち着かない。

2004.10.12 (火) 晴れ

兵庫県の判断と指導を受け、本日よりC地区の本発掘調査を開始する。まず、16地点にバックホールを入れ、②トレスと⑥トレスのある中段畑地の表土掘削を始める。上段畑地との間にはしっかりした石垣があり、16地点全体を全面発掘することは困難であると判断。第17地点①トレス、第19地点③トレス、南張張のトレスで検出された配石溝のレベル観測作業。第19地点①トレスは、近代面のコッパをグループ分けして取り上げ、近世の探石面を目指して掘り下げる。南・北区に作業員を分け、流入上の除去から開始。第19地点①トレスの背面にあけた第19地点⑤トレスでは、近代

探石による背面カット部分を検出するとともに、92号石材背後には探石土坑の肩らしきものを検出した。また、開始しているE地区の確認調査は、谷底部を避けて設定。南をE地区第23地点①トレス、北側を③トレスとする。①トレスは大阪層群の遊動層まで発掘する。

2004.10.13 (水) 晴れ時々曇り

C-I区の表土・床土剥ぎ続行。第19地点①トレスについては、下層調査を行う。92号石材の背後の状況を参考にしつつ、サブトレンチを設定し、石材のすわる面を確認する。C-I区は斜面を対象に表土の重機掘削を行う。矢穴痕を持つ割石は一部姿を出しつつある。並行してE地区の確認も続ける。

県教委文化財室の平田主査、現地C・E地区緊急視察。文化財課の竹村学芸員・田中主査来訪。

2004.10.14 (木) 晴れ

石垣を残してC-I区上段部の本発掘を重機掘削により開始する。掘削レベルは、第16地点①トレス、第16地点⑤トレスの遺構面に合わせ、数10cmから1m止まりとする。石塊は北へ行くほど少なくなる。C-I区の下段部は重機掘削の完了した面を手掘りする。A・Cタイプの矢穴痕を持つ割石は南側で多く検出され、やはり面的に面端部石材が埋もれているようである。第19地点①トレスの石材群については、下層の調査を続行。93号石材のEトレスを設定、掘削。91・92号石材間に17世紀段階と推定されるコッパを検出。上層面のコッパよりは大きく分厚い。92号石材のすわる面は土層観察から、礫混じりの地山上に堆積する10cm程度の砂泥じり粘土の上面に当たるようである。91号石材に第20地点③トレス層断面図作成。第20地点②・③トレス層注記。第23地点①トレスは、西壁側にサブトレを加え、大阪層群の確認へと向かう。第23地点②も深部へ確認調査を進める。また、谷2の底部に巨石1個が観察されたため、周囲の伐木木や落葉を除去し、谷底の横断面が見られるようになる。

2004.10.15 (金) 晴れ

第19地点①トレスは矢穴石周辺の精査を行い、日当たりを見ながら写真撮影。第19地点⑤トレスは南壁の土層断面図の作成と土層注記を行った。第20地点①・③トレスの土層注記と面図チェックを行った。第23地点①トレスは、段丘疊層と被覆土層の掘り下げのつづき。谷2の底部巨石の精査が終了し、観察したところ刻印・矢穴は無く、伐採後の砾石であることが判明した。

2004.10.16 (月) 晴れ

秋晴れですがすがしい1日であるが、秋雨前線や台風23号の影響が今週にはあり、天候が大変心配だ。

C-I区はかなり表土剥ぎが進み、矢穴痕を持つ割石、割石材が南側に偏在する事実が判明する。どんどん川との関係が考えられるが、その幅の広さを想定すると、いま少しの調査の経過が必要。C-II区では排水溝の延長部分を面的に掘り下げた結果、巨石がいくつか出土しており、検討を要する。C-III区はトレンチの深部掘削を続行。実測は、第20地点④トレス谷2の横断面と、C-I区のトレンチ配置図の作成。